鴨東通信

春

2015.4 No.97

◉日常語のなかの歴史11
てらまち【寺町】 登谷伸宏

◉てぃーたいむ
中国南北朝隋唐陶俑の世界 小林 仁

◉万博がもたらしたもの2
社会的実験場としての万博 市川文彦

◉エッセイ
都市の見せ方 三宅拓也
私の前にある紅茶と古書と自転車と 杉本弘幸
水中考古学と碇石 石原 渉

◉リレー連載 世界の中の日本研究19
教育は「悪」を語ることができるか
——教育の普遍性と日本の教育哲学 宮崎康子

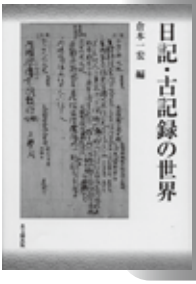
◉史料探訪59
康治三年法隆寺勝賢墨銘 揩鼓 福島和夫

思文閣出版

日記・古記録の世界

倉本一宏編

日本の日記・古記録を題材として、日本史学、日本文学など関連分野の第一線の研究者がそれぞれの視点からその本質に迫った論文集。日記とは何か、古記録とは何か、それらを記録することの意味、記主や伝来をめぐる諸問題、さらには古代・中世における使われ方など、単に日記・古記録を利用するだけにとどまらない意欲作35論考を収録した。国際日本文化研究センターでの3年間にわたる共同研究「日記の総合的研究」の成果。



◆目次◆

第Ⅰ部　日記・古記録の本質
「日記」および「日記文学」概念史大概　鈴木貞美
「日記」という文献　近藤好和
茶会記の成立　松薗　斉
日記と日記文学　カレル・フィアラ
日記と僧伝の間　榎本　渉

第Ⅱ部　日記・古記録を記すということ
具注暦と日記　山下克明
古記録の裏書について　倉本一宏
日記から歴史物語へ　中村康夫
記す祭と記さない祭　上野勝之
藤原行成が『権記』に記した秘事　板倉則衣
近世琉球における日記の作法　下郡　剛

第Ⅲ部　日記・古記録の記主をめぐって
宇多天皇の文体　佐藤全敏
日記における記主の官職名表記についての検討　小倉慈司
日記の亡佚に関する一考察　今谷　明
記事の筆録態度にみる記主の意識　尾上陽介
日記を書く天皇　西村さとみ
一人称形式かな日記の成立をめぐって　久富木原玲
『台記』に見る藤原頼長のセクシュアリティの再検討　三橋順子

第Ⅳ部　日記・古記録の伝来
かへりきける阿倍仲麻呂　荒木　浩
『御堂関白記』古写本の書写態度　名和　修
『小右記』と『左経記』の記載方法と保存形態　三橋　正
公家史料の申沙汰記　井原今朝男
真言門跡寺院における文書と日記　上島　享
『西宮記』勘物の諸本間の配列について　堀井佳代子
殿下乗合事件　曽我良成

第Ⅴ部　日記・古記録の使われ方
渡海日記と文書の引載　森　公章
平安貴族による日記利用の諸形態　加藤友康
藤原行成『権記』と『新撰年中行事』　古瀬奈津子
『明月記』の写本学研究　藤本孝一

第Ⅵ部　日記・古記録を素材として
国司苛政上訴寸考　磐下　徹
『宮中御儀法講絵巻』（三千院所蔵）の再検討　末松　剛
日記逸文から読み取れること　古藤真平
一条天皇と祥瑞　有富純也
検非違使官人の日記　中町美香子
ペリーがくるまでは、やはり鎖国である。　井上章一

【4月刊】　▼A5判・七九二頁／本体一二、五〇〇円

日常語のなかの歴史 11

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

てらまち【寺町】

寺町とは、寺院の多く集まる町や、寺院が軒を連ねた通りを指す（『日本国語大辞典』）。ここでとりあげたいのは、このうち近世城下町において政策的に設けられた「寺町」である。

寺町の成立は、豊臣秀吉の大坂城下町を嚆矢とし、同じく秀吉により大きく改造された京都がそれに次ぐといわれる。その後、各地の城下町でも寺町が建設され、現在までその独特の景観を残すところが多い。

寺町は城下周縁部に設けられたため、近世を通して維持されることがほとんどであったが、なかには寺院移転により、跡地が別の用途に利用されるところもあった。その代表が京都であろう。京都では、寺町通沿いや寺之内などに多くの寺院が集められた。だが、内裏・公家町に近接する寺町・裏寺町では、火災のたびに寺院が洛外へと移され、その跡地は、町屋・武家屋敷・公家屋敷として利用された。

しかし、こうした土地利用に対して、公家社会は強い拒否感を示した。たとえば、寛文十一年（一六七一）に現在の荒神口付近の寺院跡地で屋敷地を拝領した久世通音は、墓地にあたることを理由に拝領地を手放している。さらに、元禄十年（一六九七）には、裏寺町に屋敷地を拝借した東園基量・下冷泉為経が、井戸の水まで「不浄」であること、敷地から卒塔婆が見えて不快であることなどを理由に屋敷地の交換を要求しており、寺町・裏寺町は公家にとって住みやすい場所ではなかったことがわかる。

こうした公家衆からの要求に対して、幕府が抜本的な対策を講じた形跡はほとんどない。しかしながら、延宝二年（一六七四）、前年の火災により焼失した頂妙寺を鴨東へ移し、その跡地を公家屋敷地とした際には、墓地の土をすべて入れ替えるとともに、跡地に屋敷地を拝領・拝借する公家衆に、その現場をわざわざみせている。

寺町・裏寺町の公家屋敷がその後も定着しなかったのに対し、頂妙寺跡地にあたる仙洞御所西側は、こうした配慮が功を奏したのであろう、近世を通して公家屋敷地として利用されることとなった。

（登谷伸宏・京都橘大学助教）

てぃーたいむ

中国南北朝隋唐陶俑（とうよう）の世界

小林（こばやし）　仁（ひとし）
（大阪市立東洋陶磁美術館）

●俑とは何か

――このたび『中国南北朝隋唐陶俑の研究』を上梓されました。「兵馬俑」の「俑」といわれればなんとなくイメージはできるのですが、「俑」とはどのようなものですか？

中国では「俑」と言いますが、似たようなものは世界中にあります。たとえば日本の埴輪はよく俑と比較されます。ただ、埴輪は墓の中ではなくて外に並べるものですね。中国の俑は、人間を象った人形で被葬者とともにお墓の中に副葬する明器（めいき）の一つです。

起源ははっきりしませんが、古くは『孟子』に孔子の言葉として「始めて俑を作る者、それ後無からんや……」と出てきて、これの解釈には諸説あるのですが、春秋戦国時代には「俑」という言葉と人形を墓に埋める習慣がすでにあったことが知られています。実際に戦国時代の墓からは俑が見つかっています。そして秦の兵馬俑でひとつのピークを迎えるのです。

始皇帝の兵馬俑はほとんどが兵士の姿です。あの時代にはやはり兵士が最も必要な存在だったのでしょう。一方、華やかな文化が花開いた唐の時代には着飾ったふくよかな女性の俑が作られました。俑はまさにその時代を生きた人が作ったものですから、当時の風潮や美意識、あるいは生活の一端をうかがうことが出来るのです。時代や地域によって理想とされる姿は異なると思いますが、その違いがおもしろみの一つだといえます。

俑は春秋戦国時代から少なくとも明・清までという長い期間にわたって作られ、しかも各地で発見されています。つまり資料が豊富なわけで、中国では早くから芸術・美術研究の一つのジャンルとして成立していました。

――中国では歴史上さまざまな民族の盛衰がありました。それでも時代を通じて作られ続けたのですか？

具体的にどの程度の連続性があるのかはわかりませんが、少なくとも墓の中に俑を入れる行為はずっと続きました。亡くなった人を弔い死後の世界で幸せになって欲しいという点では共通した思いや思想があったのだと思います。

中国では支配民族が変わっても、外の文化が入るのとともに、新たな支配民族も伝統的ないわゆる「漢民族」的な習慣に染まっていくということが繰り返されました。それによって新た

な支配者にある種の正当性が担保される側面もあったのだと思います。外来文化の融合と同時に漢民族化が進んだわけです。

――俑の研究はどのように進められてきたのでしょうか？

墓が盗掘されたり農作業の途中で偶然見つかったりというのは昔からあったようですが、研究の対象となったのはそれほど古い話ではなくて、二〇世紀初頭、洛陽あたりで欧米資本の鉄道工事をした際にたくさんの墓が掘り返されて、唐三彩や俑がたくさん出てきてからです。それが市場に出たことで、各国の学者や知識人が注目しました。魯迅などもそのなかに含まれます。日本にも早い時期から注目した人がいて、北京の瑠璃廠などで買い求めたものが入ってきていました。そのなかに俑を蒐集したり調べたりする人も出てきて研究対象として認識されるようになりました。

初めの頃は出所が不明の盗掘品がほとんどで、資料の数に限界がありました。

考古学的な調査に基づいた研究は、一九七〇年代・八〇年代以降本格化します。それ以降の三十数年間でものすごい数の墓が発掘され、資料の蓄積は非常に豊富になりました。とはいえ考古学のなかでは、俑はあくまで出土品のひとつにすぎません。ほかの器物とともに種類や数、型式分類、被葬者の身分などを分析する研究が主体で、美術史的な評価がされていたわけではありません。

美術史的な研究が早くから進んでいたのは日本でした。日本では六〇～七〇年代にさまざまな美術全集や図録が出版されました。すると、やきものの研究者のなかで俑に注目する人が出てきて、美術史的な観点からも研究が進みました。

●美術史と陶磁史の両面から俑を分析

――ご著書では、「美術史的なアプローチ」と「陶磁史的なアプローチ」という二つの切り口を掲げています。

「陶磁史」を掲げたのは、やきものの歴史と関連づけながら、俑について考えるというねらいがあったからです。俑はやきものの一種です。彫刻史で扱われることもありますが、多くが型で抜いて焼いたものですから日本ではあまり彫刻とはみなされず、どちらかというと陶磁史の一ジャンルとして認識されることが多いのです。

これまでの研究を振り返っても、俑の研究は陶磁史の研究者によりなされることが多くありました。平凡社の『中国の陶磁』シリーズでも「陶俑」巻が出ています。

今回の本では、大きく分けると第一部が美術史的な研究で、第二部が陶磁史的な研究といえます。わたしはもともと中国美術史を学んでいて、陶磁史の本格的な研究は東洋陶磁美術館に就職してから始めました。

美術館では、俑という、やきもののなかで特定のジャンルの研究を続ける一方で、幅広くやきものの研究もするようになりました。ここ一〇年くらいだと思いますが、中国の青瓷（せいじ）や白瓷（はくじ）の起源を研究しているなかで南北朝時代が非常に重要であるとわかってきて、学界の中でも注目されるようになりました。そして、それ

がこの時期の俑のあり方と密接にかかわっていることに気づきました。つまりこれまで別々にやってきた俑の研究とやきものの研究がクロスしたわけです。南北朝隋唐期の俑は、やきものの歴史を明らかにするうえでも重要な資料になるのです。

――もう一つの美術史的なアプローチというのは造形的な部分の分析ですね。ご著書では地域性・時代性に注目されています。

それはわたしが一番重視していた部分です。南北朝時代にみられる地域性は九〇年代ころから美術史分野で注目されてきました。ただし、一般的には南北の比較が中心でした。しかし、じつはそれほど単純ではなくて、北でもいろいろあるし、中間的な地域もある。それを調べようというときに、多くの資料がさまざまなところから発掘されている俑というのは便利な資料なのです。けれども俑に注目する人は当時も今もあまりいなくて、現地で発掘に関わる人には特定の時代・地域を研究する人が多く、全体を見た広い視野で研究する人はほとんどいないのです。

わたしは中国の研究をするうえでは外国人なので不利な部分もあるのですが、一方でいろいろなところに行ける、だから時代性も含めて全体的・俯瞰的な視野が持てるというメリットがあると思っています。

――南北朝時代、北には遊牧民の鮮卑系の王朝が、南にはいわゆる漢民族系の王朝がありました。両者の間で見られる違いはありますか？

俑の埋葬は発掘数からみて圧倒的に北朝の方で流行しました。活気があったといっていいと思います。中国で伝統的な俑が異民族の王朝の方で流行したというのは面白いですよね。次の隋唐の俑、あるいはやきものにとってこの南北朝時代は非常に重要で、唐の洗練されたやきものの基礎はほぼこの時代に確立しているのです。とくに北朝での展開が重要だったことがここ二〇年くらいの研究でわかってきています。北朝、隋、唐というのは、変容しながらですが連続しているといってよいと思います。今回の本で隋唐までを含めたのは、そうした時間的な連続性も強調したかったからです。

――隋は北朝の中でも西の北周のなかから興ったわけですが、俑の変遷をたどると、じつは北周に滅ぼされた東の北斉の技術が隋唐に継承されたというご指摘は非常に興味深いものでした。

文化的な力では滅ぼされた北斉の方が圧倒的に優れていたことは、俑を見てもほかのやきものを見ても明らかです。隋唐への影響も見れば見るほど明らかになります。この点は従来あまり重視されてこなかったのですが、わたしは重要なことだと思います。北斉の文化的優位性は文献史学でも早くから指摘されていますが、それはモノからも跡付けられるのです。

俑を具体的に見ていくと、王朝の動きにともなって地域間でいろいろな文化や技術が動いていることが見えてきます。なかでも

優れた技術はほかの地域に動いて行く。それは当時の人やモノの流れとも関係していたはずです。今回は、都があった中心的な地域だけでなくて、それ以外の地域にも目を配ったつもりです。

とくにわたしが注目したのは南北の境界領域です。なによりはじめてその地域の俑を見たとき、その完成度・レベルの高さにとても感動したのを覚えています。俑自体には北の要素が多いのですが、埋葬の仕方には南の要素が見られて、墓そのものは伝統的な南系なのです。それが漢水という河の流域にみられたので「漢水流域様式」と名付けました。

漢中の博物館には何度か足を運び、完品だけでなくとくにお願いして俑の破片も見せてもらいました。破片からは作り方などいろいろなことがわかります。それを見ると漢中では特殊な作り方をしていて、普通は型を使って抜くので中は空洞になるのですが、漢中のものには芯があって塑像的な作り方がされていました。つまり完成度の高さの背景には、一点一点つくるという意識があったのだと思います。これは仏教塑像に見られる作り方で、ほかの地域の俑では見られません。制作にかかわった人々の来歴に関わるのかもしれません。

じつは俑と仏教造像とは結構関係があり、たとえば洛陽の永寧寺塔の内部に貼ってあった塑像を同時代の俑と比べると顔の表情など造形感覚がまったくといっていいほど同じです。この地域の俑は型で作られていますが、仏教塑像がモデルになっていると考えられます。制作の目的が違うので単純には比較できませんが、当時の役所のなかで石窟や仏像をつくる部門の工人が明器制作も担っていたという文献の記載があるので、両者の類似性は当然といえば当然です。

●新しいものを生みだす活力ある時代

――本書では白瓷の誕生についての提言もされています。

これについては陶磁史の分野で最近活発に議論されています。隋の初期に白く美しい白瓷の俑が登場します。これは俑の歴史だけでなく、やきものの歴史のなかでも重要なのです。中国の研究者の間では北斉や、もっとさかのぼって北魏ですでに誕生していたという見解も出されているのですが、俑のみならずやきものの出土資料を見る限りわたしはそれには賛成できません。

中国では「北斉の白瓷」が早くから指摘されてきました。しかしこれは低い温度で焼いた鉛釉（なまりゆう）のもので技術的には高火度焼成の白瓷とは違うものです。ただ、白いやきものを作りたいという志向はすでにあったようで、白い胎土を使って見た目には白っぽいものが作られていました。この志向は、もともと金銀器やガラスなどへの憧れから始まっていると思われます。

現時点では、隋になって白い胎土を用い、高い温度で焼く白瓷を作る技術が生まれたと考えられます。そのごく初期に白瓷の俑が誕生しているこ

とになりますが、白瓷の俑は墓のなかでも重要な役割を担っていました。当時、最新の技術を重要な俑にも採用したわけで、この白瓷俑は俑の歴史とやきものの歴史の密接な関係をよく表していると思います。

白瓷は技術的には青瓷の延長線上にあるものです。青瓷の生産は河北の東魏・北斉の都があった地域が中心でした。造形的にも北斉の様式は隋の西安地域に影響を与えるのですが、それは技術的にもいえることなのです。

やきものを簡単に白っぽくする方法は、いわゆる白化粧と先ほど述べた低い温度で焼く鉛釉の技術です。この北斉の低火度鉛釉は緑を出したり黄色を出したりすることもできて、この技術がのちに洛陽に移って唐三彩を生むわけで、ここでも北斉の技術の重要性を指摘できます。唐三彩は華やかで人目を惹きますが、こうした流れのなかで見ると必ずしも技術的に突出したものではありません。唐代の俑のなかで三彩俑の位置づけを見ると、必ずしもそれほどランクの高い存在ではなかったのではないかと思っています。

――政治的・軍事的には不安定な時代だったにもかかわらず、技術が継承されていく点は興味深いですね。

この時代には、俑だけでなくさまざまな面で新しいものを作ろうという活気を感じます。そしてそこで生まれたもののうち、優れたものは隋唐に継承されていきます。唐の洗練された文化は突然生まれたのではなく、南北朝時代に淵源を求めることができるのです。もちろん短命に終わった技術もあったでしょうが、さまざまなものが各地で生まれたというところがこの時代の魅力だと思います。

●豊富な現地調査の成果

――本書の魅力の一つは何度も現地に足を運び現物を実見した成果である点だと思います。調査での苦労話などはありますか？

外国人として各地の博物館などを訪れたわけですが、だから苦労したという経験はほとんどありません。調査を始めたのは中国に留学生として滞在していた頃で、まだ今ほど交通など便利でない時代でしたが、かなりあちこち見てまわりました。

先ほどお話しした南北境界地域にある安康にはその頃だけで三、四回は行きました。どこでもそうですが、紹介状を持って行っても、初対面の時はやはり警戒されるものです。でも何回か訪ねていくうちにだんだん打ち解けてきて、安康ではあちらの館長のご自宅に招いていただくまでになりました。信頼関係が出来てくるとさらにいろいろなものを見せてくれるようになり、最後には収蔵庫のなかも調査させてくれました。

安康では、はじめは発掘報告書に載っていた資料を見に行ったのですが、話をしているうちに年代がはっきりした墓から出た新しい資料もあると教えてもらいました。

ただ、未発表の資料というのは外国人の立場ではなかなか使いにくいので、まずは現地の研究者に発表してもらわないと使えま

せん。ところが、かといって現地での発表をただ待っているといつまで経っても発表されない事が間々あります。安康では現地の方と仲良くなったので、一緒に研究しましょうというお話しをして、日本で出した簡単な本に原稿を提供していただき発表することにしました。きわめて重要な資料だったので、早く世に出すためにこのような手順をとりました。

どこでも現場では相当数の資料を扱わなければならないので、一点一点までつぶさに管理できていないことが多く、わたしたちの視点でこれは重要ですといっても、担当者がすぐに動けるわけではありません。ですからどうすれば出土資料をより効果的に使えるかを、現地の人と一緒に考えることが大切だと思います。

留学時代にお世話になった方の多くとは、いまでも交流が続いています。今回研究をまとめることが出来たのは中国でお世話いただいた方々のおかげだと思います。外国の資料の研究をする上では、現地の研究者とのつながりは非常に重要です。そして、相手の立場を尊重しながらも、必要なことは議論するというのが本当の意味での学術交流なのだと思います。

●今後の研究の展望

――これからはどのような研究に取り組まれますか？

いまはやきものの世界に身を置いていますので、より陶磁史的な研究を推し進めていきたいと思っています。

それから、仏教美術など他の分野の研究者と一緒に、俑だけではなくて同時代のやきもの、造形芸術全体の動きを一つの枠組みとして明らかにする取り組みも重要だと考えています。

――ほかの領域の研究者との協力が重要になりますね。

本書にこれまでの研究をまとめたことで、ようやくそうした議論をする土壌が出来たと思っています。考古学的な視点での研究は今回意図的にあまり触れませんでした。それは中国で近年よい研究がどんどん出ているからで、考古学が得意とする分野はそちらに任せて、彼らがやらない部分に力を入れたつもりです。

今回踏み込みが足らなかったと思う点は、墓全体のなかで俑がどのように位置づけられていたのかという問題です。当時の人々にとっては墓そのものが一つの世界だったはずであり、それはいわば一種の総合芸術ともいえるもので、一緒に埋葬された壁画との関係、俑の置かれた場所などにも今後さらに目を配っていきたいと思います。

実際に墓のなかに入る機会が何度かあったのですが、スロープのような墓道を進んでいき墓室に入ると俑が置かれた空間を実感できて、出土した資料を見ているだけなのとは全然違う感覚になりました。墓の空間構成全体を考えていくと、当時の人々の死後の世界観やそのなかで俑に与えられた役割がよりはっきりと見えてくるのではないかと思います。

それとまだいつになるかは分かりませんが、美術館の学芸員としては、俑の魅力をより多くの人に知ってもらえる展覧会もぜひ企画したいと思っています。（二〇一五年三月四日　於：思文閣出版）

今年はミラノ万博！　じつは万博をきっかけに世の中に広がり、人びとが知らず知らずに恩恵を受けている万博の「遺産」を紹介します。（全4回）

万博がもたらしたもの（第2回）

社会的実験場としての万博

市川文彦

万博は開催されるたびに、当代の最先端技術の威力を人々へ示し、近未来を先取りした新たな社会空間のデザインを現す場である。将来像を提示するショウウインドウ効果に加え、万博の有する社会的実験場としての、もう一つの機能も見逃せない。

たとえばエレベーターの場合。一八五四年にニューヨーク世界博でE・オーチスが落下防止安全装置付のものを披露した後に、一八六七年のパリ万博で、いよいよ入場客を高さ二一メートルのパヴィリオン屋上にある展望台へと送る実用機械として登場し注目・人気を集めた。このフランスの技術者E・ルウの発明した機械は水圧式のもので、今日、一般的な電動式に先立つ方式であった。

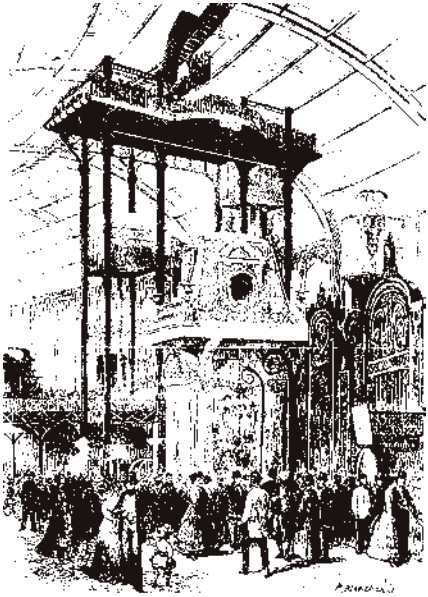
そもそも滑車とロープを用いた原理で、人の力により荷物を運搬する昇降機開発の歴史は、紀元前の古典古代まで遡る。多くの人員を安全に運ぶ、現代のエレベーターの原型となる人力に頼らぬ動力方式の登場は、しかしながら近代の到来まで数千年の長きに亘って待たねばならなかった。パリ博など一九世紀のいくつかの万博会場も介しながら、ようやくそれは世に定着していくにいたる。興味深いのは二一世紀の今日に、かのルウが開発した初期の水圧式エレベーターが再生しつつある現象。省資源性に優れ簡便な小型昇降機として蘇った水圧式機が、高齢化社会の低層住宅等での新たな需要に応えようとしている。

以上のように、さまざまな新原理発見による新発明の提示ばかりでなく、万博は既知の原理に基づく開発済みの考案物を格段に改良させ、さらに実用への途を拓く契機を与えていく実験場でもあったのであり、新たな社会的用途を見いだす働きがあった。会場内での耳目を惹きつけた斬新な実用装置としてのエレベーターばかりでなく、万博がきっかけとなって実用化と定着化が進んだ別の一例が、あの電気自動車である。

日本での前世紀末から現在へといたる温暖化対策、地球環境問題を意識した目下の電気自動車開発は、第三のブームに当たる。その第一のブームは二〇世紀初頭、日本の電気事業勃興期に到来した。これは一九世紀末から二〇世紀初頭にかけ欧米で蒸気機関

方式、内燃機関方式、蓄電池方式の三者三様の自動車開発競争が繰り広げられ、ガソリン等を用いる内燃式に先行して電気自動車の開発・改良が進んでいた大状況を反映しての現象であった。

とりわけ一九〇〇年パリ博には弱冠二五歳の技術者F・ポルシェが四輪駆動、四人乗りの改良型の電気自動車〝ローナー・ポルシェ〟を出展した。このパリ博にはポルシェの他にも、合わせて六〇台以上の電気自動車が出品されていたとされる（ちなみにポルシェは発電専用エンジン併載の〝ハイブリッド車〟開発にも着手）。この世紀転換期のアメリカでは自動車生産が年間四〇〇〇台程で、実にその約四割を占めたのが電気自動車。パリ博を受け日本でも、電気自動車輸入と国内自主生産とが始まって



1867年パリ万博での水圧式エレベーター
*L'Illustration*紙 1867年10月12日付

いた。その後の展開は、しかし速度と走行距離に優る内燃式自動車の量産化が世界規模で広がり、一般化することになる。

日本での電気自動車第二のブームは、排気ガス、大気汚染、騒音、振動などの公害が激化（「公害列島」現象）し、続いて到来した石油危機の下での一九六〇年代後半から七〇年代にかけて生じた。希少資源である化石燃料を用い、排気ガスをもたらす現行の内燃式に替わる別方式としての電気式が半世紀の時を隔て、再び注目の的に。そして、その恰好の晴れ舞台こそ、一九七〇年の大阪万博に他ならなかった。その数ある呼び物の一つが、エキスポタクシーをはじめとする、場内を静かにクリーンに駆け抜ける電気自動車二七五台であるのも当然であった。静動性、環境負荷の低さなど、改めて、その秀でた性能と実用性が会場入りした六四〇〇万人の眼前で実地検証されたのである。

これを機に、その開発は一層促進された。もっとも内燃式車の燃費向上、性能上昇により、電気自動車が日本社会へ普及し始めるには、さらに今日の、第三のブームを待つ必要があった。だが現在のブームの起点は、大阪万博での鮮明な経験をはじめとする第二のブーム時に、すでに用意されていたのである。

このように万博は最先端技術を駆使した完成品の展示のみならず、社会的実験場として、既存の事物へ革新的改良を促す契機も与えてきた。そして万博での体験が目新しく登場したそれらにさらなる変化・向上をもたらし、またその社会的定着を促進するよう作用しているのである。

（関西学院大学経済学部教授）

エッセイ

都市の見せ方

三宅拓也

二〇一五年三月、京都で初めての大規模な国際的現代美術展「PARASOPHIA：京都国際現代芸術祭」が開幕した。市内の近代建築を中心に各地に会場を展開し、準備段階でのイベントを含め、時間的・空間的な広がりを見せる。

最大の会場である京都市美術館で、普段は閉じられている地下の一室に〈美術館の誕生〉と題された展示を見る。かつて下足室として使用されていたこの部屋には、進駐軍による接収の痕跡も残る。大礼記念京都美術館として計画されてから現在までの歴史を振り返る三つの映像が浮かぶこの暗がりで、観客はこの建築が歩んできた時間に触れるのである。この空間は、明治以後の京都に意識的に光をあてることで、平安京や神社仏閣にとどまらない京都の歴史性／現代性を透写して見せようとする芸術祭のステートメントともいえようか。

〈美術館の誕生〉の映像のひとつ、文章と写真で建設経緯を辿る映像の中に、その場所の過去に触れる場面が登場する――「建設敷地にあった、京都市商品陳列所、京都市第一勧業館が解体される」――。昭和天皇の即位を記念して美術館の建設計画が持ち上がった一九二八年三月、この場所には既に〝陳列〟施設が建っていた。京都市勧業課を内部に抱え、織物や陶磁器をはじめとする特産品を並べる商品陳列所は、「本市の商業の一般を知るに格好の所」（中村大観『日本大観』京都巻、一九一五年）であり、市外からも多くの人々が訪れる。だからこそ、京都という都市をどう見せるのかという問題は、同所にとっても常に関心事であった。

京都市商品陳列所は一九〇九年に開所した市営施設で、当初は京都商品陳列所と称した。名称からうかがえるように、「製造、加工を問はず弘く海外又は他地方に販売せらる可き本市特産品の見本として来館の内外人に示し其需要を喚起する」（『京都商品陳列所の栞』一九一二年）ための施設である。実際はこれにとどまらず、京都の人々に対して内外の参考品の陳列、あるいは講演会の開催や図案作成の指導などを通じて、生産品の改良発達を促す役割を果たした。同所はすなわち、産業を通じて京都が見せたい姿・なりたい姿が可視化される場所であった。

その媒介となったのは各種の陳列品であるが、これを見せる舞台として、建築や構内施設自体も重要な役割を果たした。開所前

年末に竣工した本館の建築は、京都高等工芸学校教授・武田五一（ごいち）が意匠設計を、京都帝国大学教授・日比忠彦（ひただひこ）が構造設計を担当した。欧州の流行を取り入れた意匠を鉄筋コンクリート造の主要軀体が支えるこの建築は、最新の意匠と技術で実現したものであり、誇らしげに同所機関紙などで繰り返し宣伝された。神宮道を挟んで対面する京都府立図書館も同時期に武田が設計した建築だが、様式意匠を纏った煉瓦造のこれと比較すると、同所の先取性が意識的なものであることがわかるだろう。

さらに注目すべきは、本館裏に設けられた庭園である。園内には茶店が置かれ来訪者を楽しませたが、それ以上に、京都の造園産業の優位を示す〝模範的庭園〟として、造園技術はもちろん造園資材や植物の実物陳列場となることが意図されていた。造園を請け負ったのは、七代小川治兵衛を筆頭とした京都園芸会である。「京都特有の造園術の一端を示せり」（前掲書）と宣伝された庭園が、近代京都に新しい庭園文化をもたらした〝植治の園〟であることも、同時代的な京都を見せようという意図を感じさせる。このように、建築や庭園を通じて商品陳列所が提示する京都は、新しい時代の姿であった。

もちろん、対外的な宣伝の場においては、〝京都らしさ〟や〝日本らしさ〟のイメージ、あるいは文化や技術の時間的蓄積が時に参照される。例えば、同所の英語版公式カタログには名所の写真や祭事の木版画が多く掲載され、英語版機関誌においても、生花や茶の湯などの日本文化を紹介する木版画が掲載された。とはいえ、近代化する姿が無視されるわけではなく、後者においては西陣織の工業化の歴史が写真とともに紹介された。同所曰く、「京都は歴史的な寺院や古跡で知られるが、芸術の中心地であること、そして商工業とともに生きる都市であることを忘れてはならない」（『A Directory of Kyoto and Its Traders』一九一三年、筆者訳）のである。

ここで紹介した商品陳列所は、京都に限らず、明治から昭和戦前期に全国的に普及した公共施設である。初期においては物産陳列所などと称するものも多い。例えば原爆ドームは広島県物産陳列館として建てられたものだ。私はこれらを〈陳列所〉と呼ぶ。どの〈陳列所〉も都市の勧業を目的とする点で変わりはないが、都市が違えば産業も違い、〈陳列所〉を通じて見せる都市の姿も異なる。今春刊行された『近代日本〈陳列所〉研究』は、これが普及した背景を探るとともに、その多様なあり方を紹介するものである。

最後に現在の京都市美術館に戻ろう。実はここに商品陳列所の痕跡が今も残っている。収蔵庫建設などで姿を変えた部分があるものの庭園はおおよその骨格を維持し、動物園側には商品陳列所時代の門柱が残る。京都市美術館を訪れる際には、美術館前史ともいえる記憶を辿りながら、近代の京都が見せようとした都市の姿に思いを巡らせてみてはいかがだろうか。かつての茶店はないが、幸いにも芸術祭期間中はカフェが出店している。今なら〝模範的庭園〟での観賞後の一服も体験できるはずだ。

（京都工芸繊維大学大学院助教）

エッセイ

私の前にある紅茶と古書と自転車と

杉本弘幸（すぎもと ひろゆき）

家でどうしても集中できず、研究することがなかなかできないわたしは、もっぱら学生・院生時代は大学の研究室や図書館で研究をしていた。その当時から、気分転換にカフェでも研究をしていた。

だが、そんな私もいつしかオーバードクターになっていた。そうすると、当然、研究する場所を確保しなければならなくなった。普段の職場では、当然労働をしなければならない。さいわい、いくつかの大学で非常勤講師をさせていただいていたが、講師控室や大学図書館の開いている時間には限りがある。そこで、必然的にカフェで研究する時間が増えていった。

京都は「歴史都市」であり、しかも「喫茶都市」でもある。老舗の喫茶店やカフェに加え、近年流行の町家リノベーションタイプの「おしゃれカフェ」があちこちに点在している。チェーン店しかない無惨な街とは異なり、店選びには困らないように思えた。

しかし、そんな名店ぞろいの「喫茶都市」京都においても、研究活動に耐えうる名店は希少な存在であった。私が名店に求める条件はいくつかある。第一に机が広いことである。歴史学研究は史料が勝負だ。いくら、パソコンに研究論文や史料をＰＤＦ化して取り込んでも、限界がある。パソコンと史料と本が十分に置けなければ、研究はできない。第二にパソコンの電源がとれることである。ノートパソコンのバッテリーには限りがあるのだ。第三に独自の無料ＷｉＦｉが設置されていることである。インターネットはいまや歴史学研究の必需品だ。第四に飲み物、食べ物がうまいことである。私は、特に紅茶とタマゴサンドの味を重視している。第五に長居ができることである。これは店主との信頼関係にもよるが、数時間は滞在できなければ、落ち着いて思考はできない。当然、混んでいるときは風のように去るのが、長く通うコツである。第六に最低、夜中の一一時～一二時まで、できれば夜中の二時ぐらいまでは営業していることである。締め切り間際には一分一秒が貴重なのだ。

もう一つ重要なのは、書店や古書店の存在である。京都は「歴史都市」であり、しかも個性的な書店や古書店が多い都市でもある。私は三月書房のような書店も好きだが、古書店の方がもっと好きだ。次々と書店や古書店が街から消えていき、ネット古書店

やブックオフが跋扈する現在であるが、書店や古書店の店主のみなさんに長年探していた本や史料を見つけていただいたり、探していただいたことも数多い。本や史料との出会いは、人の出会いとつながっているとつくづく思う。

もともと、カフェめぐりや、書店、古書店めぐりは趣味の一つだった。私はその過程を楽しみつつ、雑誌などで情報を探したり、同好の友人に教えてもらい、あるいはともに地図を片手のフィールドワークとして京都市中をかけめぐり、私の求める条件をみたす数少ない名店に出会うことができた。しかし、世は慢性的な不況の時代である。拙著『近代日本の都市社会政策とマイノリティ――歴史都市の社会史――』を編んだ、それらの名店のいくつかは、露と消えてしまった。現存する数少ない名店の店主のみなさんには、いつもお世話になっている。

こういった名店探しの過程で、ひとつ実感したことがある。京都は「歴史都市」であり、しかも「貧困都市」でもある。生活保護率や、国民健康保険の滞納率の高さが全国有数であることは、よく知られているだろう。特に近年流行の町家リノベーション型カフェ、雑貨屋、飲食店などの周辺は、私が史料調査やヒアリング調査で訪れた地域とほぼ重なっていた。それは、京都の観光地とされている地域や、市内中心部の町家がたちならぶ地域であった。

つまり、観光客が訪れる街並みや、典型的な「町衆」が住んでいるとされている地域に、母子世帯や生活保護世帯、特に高齢者世帯が多く存在しており、彼／彼女らがいなくなった後に、流行の町家リノベーションカフェや雑貨屋、飲食店などが立ち並んでいるのである。これが「歴史都市」京都の現実なのであった。

こうしてみると、私の学問は多くの方々のお世話になりながら史料を集めて、読み込み、自転車で市内をかけめぐり、様々な場所でお話を聞く中で、現実にぶちあたり、形成されていったといってよい。京都の街のすべてが、私の研究を育んでくれた。私は本来かなり融通無碍な人間であるが、京都の街で研究を続ける中で、これだけはという一定のこだわりや視点がようやくうまれた。ようするに現在の私自身になっていったのである。これからも、研究を続けることが許されるなら、多くの方々のお世話になりつつ、地道な学びを続けていきたい。

なお、拙著のあとがきについてのリドルをときあかせば、逃現郷は西陣の名店であり、ルフナはスリランカ南部ロウグロウン地域産の茶葉の名称である。

（京都工芸繊維大学・佛教大学・立命館大学非常勤講師）

エッセイ

水中考古学と碇石

石原（いしはら）　渉（わたる）

苗字のせいか、幼い頃から石に興味があった。友人と路傍の小石を日がな一日掘り起こしては、せっせと宝箱に詰めた思い出がある。また夏休みは祖父の船で毎日のように海釣りに出かけた。しかしそこは子供、釣りに飽きると、手づくりの箱メガネで海底を覗いた。海草が揺らぐ岩影には小魚が泳ぎまわり、時には茶碗や皿のかけらが転がっていた。

「三つ子の魂、百まで」とは、よく言ったもので、そういう幼児体験が現在へ繋がっている。大学で海洋学と考古学を学び、学際研究である水中考古学を目指した。しかしなかなか周囲の理解は得られず、恩師の一人は、真剣に将来を心配して、もっとまともな研究テーマに切り替えろと意見してくれた。そんな中、背中を押してくれた人たちのおかげで、長崎県松浦市の鷹島海底遺跡と出会った。

弘安四年（一二八一）、四四〇〇隻の軍船と、蒙古軍一四万人が、九州は伊万里湾に浮かぶ鷹島南岸に集結した。そこを巨大な暴風雨が襲う。蒙古軍は大打撃を被って海底に沈んだ。そしてその痕跡が八〇〇年の時を経て、ようやく海底から発見されることになった。それが鷹島海底遺跡である。

昭和五六年、江上波夫先生を団長とする文部省科学研究費特定研究「古文化財」水中遺構・遺物の探査並びに保存に関する研究が、その鷹島沖で開始された。その頃、私は母校の研究室で燻っていたが、恩師の推薦で、現地に赴き諸先輩に混じって海底から引き揚げられる遺物の実測や記録に明け暮れた。以来、この遺跡とは三十数年にわたって関わり続けている。

そんな中で海底に取り残された碇石（いかりいし）と出会った。中世における中国の碇は、木石碇（ぼくせき）といって、木製の爪をもつ碇本体と、錘や桿（てこ）の役割を荷負う碇石とが組み合わされたもので、木製の碇本体は劣化のため残存しておらず碇石のみ発見されることが多い。このような例に漏れず、鷹島海底遺跡から引き揚げられる碇石も同様だったが、どれも左右対称の角柱を半分に切ったような形で発見された。博多湾などから引き揚げられる、一石型の「蒙古碇石」とは、明らかに異質であった。そこで我々は、大暴風雨の影響により、碇石もその圧力に耐えかねて途中から折れたものと推測した。ところが平成六年の海底調査で出土した木石碇は、木製の碇

本体を保ったままの姿を留め、しかも驚くことに、その碇石は、あたかも一本の角柱を左右に分割したような、左右対称一対型で、それを碇本体に左右から装着するようになっていた。そこで、以前、引き揚げられた碇石も実はこの形式であることを知らされた。そしてこの発見は、これまで北部九州各地の海底から引き揚げられた「蒙古碇石」が、実は蒙古軍船のものではなく、中国貿易船のものではないか、という疑問を提起することになる。

一九七三年に福建省泉州市后渚港内で発見された南宋末期の貿易船にともなう碇石も一石の角柱対称型であったことを思えば、中世の貿易港であった博多港に多数の貿易船が出入りし、その船の碇が同地から出土しても何ら不思議はない。

碇石は、南はフィリピンから北はウラジオストクに及ぶ海域で出土し、その類型も多種多様である。再度、東アジア全体の資料を俯瞰し、精査してみると、これまでの定説に疑問符を付けざるを得ないことがわかった。

地球の七〇・八パーセントは海で、すべて繋がっている。更に言うと、淡水、塩水の湖沼、河川まで含めると、地球の大部分は水圏に覆われている。

人は、視点を生活空間の中に据えて物事を捉えがちである。しかし、発想を少し変えて水面下に思いを繋げ、そこにも人類史の痕跡が眠っていることを想起してくれたら、その視野は大きく開かれるはずである。

ノルウェーの人類学者ヘイエルダールは「海は文明を運ぶベルトコンベアーだ」と述べた。古来、あらゆる文物が波濤を越え、隔たった地域間を往来し、中には不幸にも波間に消えたものもあったことだろう。海水面の上昇や地盤沈下、あるいは地震によって水没した地域もあるに違いない。今日、人類史を探求するために世界各地で多くの発掘調査が行われている。しかし、その約一〇分の一が、水中調査で占められていることを知る人は少ない。

最近、台湾の澎湖（ほうこ）諸島の海底から原人の下顎骨が発見され、北京原人、ジャワ原人、フローレス原人に次ぐ、アジア四番目の澎湖原人が確認された。付近の海底からは象の骨も出土するというから、当時は陸地であったに違いない。そういえば鷹島海底遺跡でも水深二五メートルの海底から、更に一・五メートル掘り下げた地層で、縄文早期の押型文土器（おしがたもんどき）の包含層を発見したことがある。北部九州では縄文前期の曽畑式土器（そばたしきどき）を伴う海底遺跡が存在するが、更に深い場所で縄文早期の遺跡が存在したことに驚愕した。

四囲環海のわが国は、周辺の排他的経済水域を加えると、その海洋専有面積は世界第六位だという。当然、そこにも人類史の痕跡が残されているはずである。

水中遺跡の調査研究はハイテク化が進み、この分野に興味を抱く若者も増えている。ようやく時節到来かと期待するその思いは、果たしていつ叶えられるのだろうか。

（日本習字教育財団企画編集部長・観峰館副館長）

教育は「悪」を語ることができるか
――教育の普遍性と日本の教育哲学

宮崎康子

つい先日、次のような質問を受けた。二〇〇〇年代に入ってから悪の概念が揺らいできているのではないか、と。たしかに、何を悪とするのかは立ち位置によって異なってくる。しかし、悪が善の欠如として捉えられる限り、揺らいでいるのはむしろ悪の準拠軸としての善の概念ではないか、とそのときは応じた。

わたしの専門は教育哲学で、フランスの思想家バタイユ（Georges Bataille, 1897–1962）の思想、とくに「悪」論から教育を（再）考察しようとしている。性や死、暴力といった概念に彩られるバタイユの思想については、最近は邦訳や再訳が次々と出ているが、アカデミズムの俎上にあがるようになったのは、彼の死後、フーコーによる評価を待ってのことだった。もっともそれらの大半は、文学や美学あるいは社会学や哲学の分野におけるものであり、教育の分野ではほとんど扱われていないのが現状だ。

教育と聞くと、まず学校教育が思い浮かぶのではないだろうか。近代における国家制度としての学校は、社会化をその第一の機能としているため、社会において有用（有効）な知識や技術、態度の形成が促され、学習経験の蓄積が成績として評価される。学校教育は、原理的に有用性の次元に設定されているのだ。

バタイユの考えでは、有用性は人間にとっての善であり、人間は理性によって有用性の圏内に自らを隷属させることで、日常の安定を保っている。未来のより良い結果を目指すことなく、瞬間の生に自らをゆだねることは、秩序を、安定した自己意識を破壊する異質な出来事に呑みこまれることであり、それゆえ、社会道徳における善悪の悪とは異なるものとして（大文字の）「悪（le Mal）」と呼ばれる。善の一形態である通常の悪は、学校教育においては矯正か排除の対象とされるが、バタイユが扱う性や死や暴力は、有用性（社会道徳そのもの）を侵犯する力としての「悪」であるため、学校教育の圏域を大きく超え出てしまうのだ。実践的な教育学も然りであるだろう。しかし、教育哲学においてはそのような事象を考察することが可能である。

バタイユは、人間にはそもそも善への強い志向（通常は禁止命令として現れる）と、同時に、その反動として「悪」へのこれもまた強烈な志向（禁止の侵犯）が内在されており、それら二つの矛盾する激しい動きが交差する点が人間の生の全体である、と述

べている。その志向すべき善が以前ほど定かでなくなってきているのが、現代ではないだろうか。善への志向が強ければ強いほど、振り子の針は「悪」への動きに強く触れることになる。強すぎる善への志向は強い同質性を強いるため全体主義へも向かうし（いじめ）、強烈な異質性としての「悪」の体験は、日常への帰還を困難にする（死や狂気）。異質性とは、単なる差異ではなく、聖なるものにつながるような圧倒的な隔たりである。反対に、善への志向が弱ければ、秩序は不安定なものとなり得る（騒乱や戦闘）。そのような秩序はもはや理性が求める善ではないだろう。そこでは「悪」が常態化してしまう。こうしたバタイユの思想を、教育哲学はどのように受け止めることができるだろうか。

本来、教育の根本には異質性との出会いが想定されている。学校教育においてもこのことは変わらない。知識を増やすことは、単なる経験の蓄積だけではなく、新しい知に触れることにより、それまでの世界観を根底から覆えされるような体験でもある。生きることは、異質性との出会いを重ねることであり、そのことによってわたしたちは自己を拡大するのではなく、それまでの自己を一度徹底的に解体して、新たな自己として生成する体験の繰り返しである。教育の使命は、小さな芋虫が大きな芋虫になるような変化ではなく、芋虫が蛹（さなぎ）から蝶へと変わっていくような変容の契機をもたらすことにあるはずだ。

ところで、二〇一一年と翌一二年に約半年づつ、ニューヨーク大学に研究者留学をする機会を得た。浅薄な理解だが、ニューヨークといえば、異質なもの同士がその異質性を保ったまま混在・共存する社会だというイメージがあった。実際に生活してみると、同質性が希薄な環境では真剣な対話なしには何も始まらないことへの不安や恐怖と、同質性への従属からの解放感とを強く感じさせられた。これらの感覚は、同質性と異質性の関係について、人間と「悪」との関係についての考察に加え、わたし自身の在り方にも大きな影響をもたらした。

ここでは「世界のなかの日本研究」について書くべきなのだが、教育哲学においては日本研究は盛んとは言えない。むしろ、教育の普遍性への問いという問題圏を共有している。留学時の体験や海外学会における研究動向等を鑑みると、異質性に触れる体験をどう受け止めるかというテーマをめぐる研究が、確実に増えてきていると感じる。まったく異質な他者との出会いをホスピタリティ（歓待）やケアの文脈で考察したり、有用性を超え出る次元の体験と教育の関係を問うといった研究に、全体的な関心が向いてきているように思われる。このような研究は従来からもなされてはいるが、グローバル化が進むなか、より一層現実的関心と結びついているのだろう。

バタイユの「悪」論は、教育は「悪」をいかにして語ることができるのか、という問題をつきつけてくる。これは普遍的でありながら、きわめて現代的な射程を持つ問いであり、教育哲学の課題として取り組むことに意義を感じている。

（国際日本文化研究センター特任助教）

史料探訪 ⑤⑨

康治三年法隆寺勝賢墨銘　揩鼓

福島和夫
（上野学園大学　日本音楽史研究所長）

上野学園大学　日本音楽史研究所は、一九七三年に研究施設「上野学園日本音楽資料室」として開設したが、その淵源を辿れば、日本音楽史料の組織的収集に着手した一九六三年に始まる。

「明治維新以前の日本において行われた音楽」を研究対象として、雅楽・仏教音楽・能楽・近世音楽の四研究部門、および楽器史料室と、二〇一四年新設の東洋音楽史料室を置く。

楽器史料は「久邇宮家旧蔵雅楽器類」を中核とする比較的小規模な収集である。当然ながら、当研究所としては、日本および東洋の楽器を「民族音楽の楽器」としてではなく、音楽史学の楽器史料として認識し、扱っている。

二〇〇一年六月八日、楽器「揩鼓」の鼓胴一口が到来した。

黒色の直円筒。口径・筒長ともに各二十五センチ程、つまり人の肘から手首までにほぼ等しい。外側の黒漆は艶を失い、剝落や無数の断文を生じ、乳白色の黴か汚れか、紋様かが拡がり、処々には朱色も見える。

鼓胴内壁に墨銘があり、「敬白救世利生宝前」「結縁法隆寺旧楽器」「康治三年□二月廿二日」（一一四四）「五師勝賢」等の文字が見える。『平安遺文　金石文編』をみると、次の記載があった。

〇二九三　奈良県法隆寺楷鼓銘

康治三年甲子五月廿二日鉦鼓三之内　伍師勝賢大法師　和州法隆寺聖霊会

①奈良県生駒郡斑鳩町　法隆寺蔵　②文は「法隆寺銘文集」（夢殿十三号）による。④康治三年は二月二十三日天養と改元AD一一四四。土井実氏「奈良県銘文集成」には「二月」につくる。

現行の雅楽演奏伝承で用いられる打楽器は、羯鼓（右方では三鼓）と太鼓および鉦鼓であるが、奈良時代には、羯鼓とともに腰鼓や揩鼓（答臘鼓）、雞婁鼓、鼗等の胡楽（西域楽）系鼓類も、唐代中国から渡来し、平安時代にも用いられていたことは承知していた。

しかし中国では唐朝滅亡後、五代を経て北宋にいたり、これらの胡楽系鼓類は急激に衰微した。なかでも揩鼓は、十世紀頃には楽器も伝存せず、その形状も不明となったと考えられ、現在にいたっている。

「答臘鼓制　広於羯鼓而短　以指揩之　其声甚震　俗謂之揩鼓」陳（五五七～五八九）の僧智匠撰『古今楽録』の「鼓制」の項にある揩鼓の記述である。少し前の羯鼓の条に記す「羯鼓正如漆桶」に対応するもので、「漆桶の如き〈長円筒〉の羯鼓胴に比し、揩鼓胴は羯鼓胴よりも（於）〈口径〉が広く、〈筒長〉は短い」と記す。

『古今楽録』は早く逸書となるが、鼓制の項は唐代の『通典』に収載されて流布する。ただし「於」一字を欠落。この欠字部分に後世『文献通考』が誤字「如」を誤入した結果、本来は対照的形状の羯鼓と揩鼓を、同一形態とする自家撞着的文章となり、後世の昏迷の要因となった。

揩鼓胴
（上野学園大学　日本音楽史研究所蔵）

また、陳暘著『楽書』（宋、徽宗〈一一〇一～二六〉代成立）は「答臘鼓上中下三図」を収載するが、いずれも羯鼓と同様の形状であり、昏迷は実に今日にまでおよんでいるのである。

一方、日本においては、宝亀十一年（七八〇）の『西大寺資財流記帳』をはじめ諸寺資財帳の記載、古記録・東大寺華厳会等諸大会記録にみえる揩鼓の演奏記録、『楽人補任』等の奏者記録等があり、狛近眞著『教訓抄』（天福元年〈一二三三〉）は、揩鼓の楽人・奏法・楽譜・声歌（しょうが）・口訣等を詳記する。即ち御賀等、大規模な舞楽奏演においては、羯鼓と対をなす揩鼓の勤仕が認められるのである。ただし南北朝以降の舞楽衰退期には、このような〝場〟はほとんどなく、文安二年（一四四五）が揩鼓実奏の最終例となり、楽器の伝存も皆無とされて、今日にいたったものである。

敬白　救世利生宝前／右為結縁法隆寺旧楽器具致／□禄重所司五師大衆等各儲□□／奉供養如右敬白／康治三年甲子二月廿二日大衆等／□□五師勝賢大法師

右は墨銘甲である。鼓胴内側に墨書。対向面にも、ほぼ同趣旨の「御霊会御供養所司」墨銘乙がある。

五師勝賢は、永久二年（一一一四）に「法隆寺一切経」写経収集事業を発願し、勧進元となったことで著名な法隆寺僧である。

揩鼓胴の外側の加飾については、布被（ぬのき）せはなく、直接黒下地塗りの上に、生漆（きうるし）を塗布する、最も古様の漆技法である（北村昭斎氏示教）。また二〇〇六年六月、東京文化財研究所において、蛍光X線分析装置による化学成分調査を実施したところ、外側黒色

全面から金が、また両側の金具からは金と砒素が検出された。つまり外面は金で覆われ、金具は金鍍金された金色の楽器だったのである。

現在は、楽器としての機能を調査するため、復元楽器を製作して、奏法等について調査を実施中である。幸い古楽器復元製作の第一人者である冨金原靖特別研究員が製作を担当し、また本学音楽学部の岡田全弘客員教授の協力を得て、奏法の研究等を実施している。

二〇一四年三月七日、第一回東洋音楽史研究国際シンポジウム「唐代音楽の研究と再現」（当研究所主催）の演奏会において、初めて揩鼓が合奏に加わり、現行雅楽の打楽器群にはない、中音域の豊かな鼓声を響かせた（演奏協力　伶楽舎）。

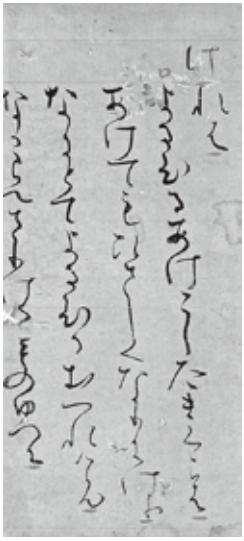
岡田全弘氏（上）と復元揩鼓（下）

上野学園大学　日本音楽史研究所

〒340-0048　埼玉県草加市原町2-3-1
TEL 048-942-8600　FAX 048-942-8601
メールアドレス　nok@uenogakuen.ac.jp
ホームページ　http://www.uenogakuen.ac.jp/researchinstitute/

- 休館日　日曜日・祝日、その他臨時休館日
- 閲　覧　予約制（大学院生以上の研究者に限る）。事前にお問い合わせ下さい。

― MEMO ―



〔梁塵秘抄断簡〕　平安院政期

書評・紹介一覧　12～3月掲載分

※（評）…書評（紹）…紹介（記）…記事〔敬称略〕

近代日本高等教育体制の黎明
（紹）『科学史研究』No.272（藤本大士）

住友の歴史　上巻
（紹）広島史学研究会『史学研究』第286號
（紹）「化学工業日報」12/8

住友の歴史　下巻
（紹）広島史学研究会『史学研究』第286號
（紹）「化学工業日報」12/8
（紹）日本鉱業史研究会『日本鉱業史研究』No.67

緒方郁蔵伝
（記）「読売新聞」夕刊　3/30

新島襄を語る（十）志を継ぐ
（紹）「熊本日日新聞」12/14

中世の契約社会と文書
（紹）『古文書研究』78号（伊藤啓介）

中世後期の香文化
（紹）『AROMA RESEARCH』No.61

東寺百合文書（十一）
（紹）「京都新聞」夕刊　1/7

日本古代の武具
（紹）『刀剣美術』695号
（紹）『歴史読本』60巻2号

日本古代文書研究
（紹）『日本歴史』802号（鷺森浩幸）

仏教美術を学ぶ
（紹）『UP』第509号（佐藤康宏）

幕末・維新の西洋兵学と近代軍制
（紹）「近時新聞」20号
（紹）「中国新聞」1/20
（記）「朝日新聞」2/4
（記）「山口新聞」2/17

幕末期の老中と情報
（紹）『ヒストリア』248号（鴨頭俊宏）

蘭渓和尚語録
（記）「静岡新聞」夕刊　2/27

歴史における周縁と共生
（紹）「日医ニュース」12/20
（評）『日本医史学雑誌』60巻4号（三﨑裕子）

老農・中井太一郎と農民たちの近代
（紹）『日本歴史』799号（西村卓）

12月から3月にかけて刊行した図書

図　書　名	著　者　名	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
風俗絵画の文化学Ⅲ	松本郁代・出光佐千子・彬子女王編	1775-5 C3070	7,000	12
幕末・維新の西洋兵学と近代軍制	竹本知行著	1770-0 C3021	6,300	12
熊沢蕃山の思想冒険	山田芳則著	1783-0 C3010	5,000	12
平安時代陰陽道史研究	山下克明著	1780-9 C3021	8,500	1
天下人の神格化と天皇	野村玄著	1781-6 C3021	7,000	2
日本中世の環境と村落	橋本道範著	1764-9 C3021	8,400	2
東寺百合文書を読む（2刷）	上島有・大山喬平・黒川直則編	0978-1 C1021	2,500	2
幕藩政アーカイブズの総合的研究	国文学研究資料館編	1798-4 C3021	8,500	2
中国南北朝隋唐陶俑の研究	小林仁著	1790-8 C3072	13,000	2
近代日本〈陳列所〉研究	三宅拓也著	1788-5 C3052	7,800	3
近代日本の都市社会政策とマイノリティ	杉本弘幸著	1789-2 C3036	7,200	3
琳派　響きあう美	河野元昭著	1785-4 C3070	9,000	3
徳川社会と日本の近代化	笠谷和比古編	1800-4 C3021	9,800	3
近世の公家社会と京都	登谷伸宏著	1795-3 C3021	8,000	3
日記・古記録の世界	倉本一宏編	1794-6 C3021	12,500	3
碇の文化史	石原渉著	1791-5 C3021	5,800	3

12月から3月にかけて刊行した継続図書

シ リ ー ズ 名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
蘭渓道隆禅師全集	1	1	蘭渓和尚語録	1777-9 C3315	15,000	12
住友史料叢書	29	29	札差証文　一	1784-7 C3321	7,500	12
禁裏・公家文庫研究	5	5	第五輯	1792-2 C3321	12,000	3
技術と文明	37	37	19巻2号	1803-5 C3340	2,000	3

（表示価格は税別）

営業部より

▼桜の余韻を楽しむ間もなく、梅雨のことを考えると憂鬱です。梅雨の雨は「シトシト」ではありませんでした？ またバケツをひっくり返されるのでしょうか。「シトシト」だと風情で終わるものの…倉庫が心配です。（江）

☆学会出店情報　小社刊行図書を展示販売

※出店日は変更の可能性有

日本医史学会（日本綿業倶楽部）　4／25（土）～26（日）
社会事業史学会（愛知県立大学）　5／9（土）～10（日）
美術史学会（岡山大学）　5／22（金）～24（日）
歴史学研究会（慶應義塾大学）　5／23（土）～24（日）
日本科学史学会（大阪市立大学）　5／30（土）～31（日）
家具道具室内史学会（学習院大学）　6／6（土）
茶の湯文化学会（東洋英和女学院）　6／7（日）
日本宗教民俗学会（大谷大学）　6／13（土）
法制史学会（関西学院大学）　6／13（土）～14（日）
日本宗教文化史学会（龍谷大学）6／27（土）

編集後記

▼陶俑の魅力の一つはその豊かな表情。なかにはユーモラスな俑もあり、見ているだけで楽しめます。妖しい爺さん、うなだれて体育座りするお兄さん、絶対腹に一物ある文官……。一つでも気になった方はぜひ本をご覧ください。（M）

▼近所の某百貨店の某電鉄駅へ通じる地階ショーウインドウは洒落ていて、書籍が沢山飾ってあります。ただし白い死骸のようなダミー本を。本は中身あってこそと、通るたび思います。（h）

▼京都で花見といえば円山公園。一見ただの公園ですが、実は寺社堂塔や旅館街などの重層的な歴史がうずまく不思議な場所。花も団子も飽きた頃には、歴史散策をおすすめします。（大）

▼京都より一足早く満開を迎えた千鳥ヶ淵の桜を堪能してきました。車座で宴会中の人々は、中国語、ベトナム語とお花見も国際化。（Q）

▼ここ数年プロジェクションマッピングが盛んです。伝統建築が普段とは違う幻想的な空間に変化する様はまさに圧巻の一言です。（m）

▼学生時代に難しくて、断念した学術書に再チャレンジ中。不思議とスラスラと読めるように。年月の賜物でしょうか。（I）

▼表紙図版：新潟県物産陳列館　陳列の様子（絵はがき／『近代日本〈陳列所〉研究』より）

鴨東通信（おうとうつうしん）　四季報 No.97

2015（平成27）年4月20日発行

発　行　株式会社 **思文閣出版**

〒605-0089
京都市東山区元町355
tel　075-751-1781
fax　075-752-0723
e-mail　pub@shibunkaku.co.jp
http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン　鷺草デザイン事務所

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回（4･7･9･12月）刊行しております。
代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

中国南北朝隋唐 陶俑の研究

【3月刊行】

小林仁著

始皇帝の「兵馬俑」で知られる俑は、死者とともに埋葬される副葬明器で、中国の南北朝から隋唐時代は質量ともにその黄金期の一つである。近年各地の葬墓から続々と出土例が報告され、とくに考古学的手法による研究の蓄積が著しい。これに対し本書は、豊富な実物調査に基づいて、膨大な数の資料を造形的特質、様式の変遷、地域性などによって整理し、美術史・陶磁史的視点からさまざまな論点を提示。収録図版多数。

内容

第Ⅰ部　南北朝時代の陶俑の様式変遷と地域性
第1章　洛陽北魏陶俑の成立とその展開
第2章　北朝鎮墓獣の誕生と展開
第3章　南北朝時代における南北境界地域の陶俑について
第4章　南朝陶俑の諸相
第5章　北斉時代の俑に見る二大様式の成立とその意義
第6章　北斉鄴地区の明器生産とその系譜
第Ⅱ部　隋唐時代の陶俑への新たな視座
第7章　隋俑考
第8章　白瓷の誕生
第9章　初唐黄釉加彩俑の特質と意義
第10章　唐代邢窯における俑の生産とその流通に関する諸問題
第11章　西安・唐代醴泉坊窯址の発掘成果とその意義
第12章　唐時代の俑の制作技法について

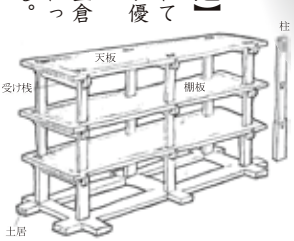
▼B5判・カラー口絵八頁＋四三〇頁／**本体一三、〇〇〇円**

こばやし・ひとし…一九六八年東京都生。大阪市立東洋陶磁美術館主任学芸員。

正倉院宝物と古代の技

木村法光著　【5月刊行予定】

正倉院宝物はどのような材料で製作されているのか。奈良時代の匠が用いた技術が優れていた理由は何なのか。長年、正倉院事務所保存課に勤務し、正倉院宝物の調査・研究、保存・管理に携わってきた著者の研究成果を一書にまとめる。



棚厨子模式図

予定内容

第一部　正倉院宝物の保存と管理　正倉院を守ってきた人々／日本の伝統工芸の源流としての正倉院宝物／正倉院薬物の保存と管理／正倉院楽器の保存と修復／正倉院事務所における復元模造／『壬申検査社寺宝物図集』と正倉院宝物／正倉院宝物の残材調査
第二部　正倉院宝物の木工・漆工・大刀　正倉院漆工品の内部構造と施工／正倉院の木工品に見る接合技法／正倉院の大刀鞘の素地と木取り
第三部　正倉院宝物の家具・調度と技法　正倉院宝物にみる家具・調度／正倉院の愛すべき箱たち／正倉院宝物にみる文様
第四部　微に入り細に入り　琫瑁螺鈿八角箱／合子／漆胡瓶／奈良時代の平脱・平文／紫檀木画箱の復元模造／憧旛鈸具

▼A5判・五〇八頁／**本体一五、〇〇〇円**

きむら・のりみつ…一九三九年滋賀県生、一九六七～一九九九年宮内庁正倉院事務所保存課勤務。その後、文化庁文化財保護審議会専門委員、京都市立芸術大学教授、奈良国立博物館客員研究員など歴任。

日本中世の環境と村落

【3月刊行】

橋本道範著

第一部では、中世琵琶湖漁撈と首都京都での消費という問題を中心に、中世村落にとっての「水辺」における漁撈の歴史的意義を問い、第二部では、他地域の検討もふまえ、十三世紀を画期として、小さなムラが精緻な地域資源利用の主導権を握るとする「生業の稠密化」論を提起し、従来の集約化論や集村化論を止揚する。自然環境と人間との関係性を議論の中心に据えた村落論を構築する意欲作。

内容

序　章　戦後における歴史学の自然環境理解と村落論

■第一部　生業と村落■

琵琶湖における一三世紀のエリ漁業権の転換とそこにおける村落の役割／中世における琵琶湖漁撈の実態とその歴史的意義―「湖辺」の漁撈を中心に／中世における「水辺」の環境と生業―河川と湖沼の漁撈から／中世琵琶湖における殺生禁断と漁撈／寺辺殺生禁断試論―宗教的戒律がつくる心理的景観／中世前期の堅田漁撈―『賀茂御祖皇太神宮諸国神戸記』所収堅田関係史料の紹介／年中行事と生業の構造―琵琶湖のフナ属の生態を基軸として／一五世紀における魚類の首都消費と漁撈―琵琶湖のフナ属の旬をめぐって

■第二部　庄郷とムラ■

荘園公領制再編成の一前提―辻太郎入道法名乗蓮とその一族／王家領備前国豊原庄の基礎的研究／近江国野洲郡兵主郷と安治村―中世村落の多様性・不安定性・流動性・階層性について／中世の「水辺」と村落―「生業の稠密化」をめぐって

▼A5判・四四四頁／本体八、四〇〇円

はしもと・みちのり…一九六五年岡山市生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程国史学専攻中退、京都大学博士（文学）。現在、滋賀県立琵琶湖博物館専門学芸員。

中世村落の景観と環境

山門領近江国木津荘

水野章二編

現存する検注帳・引田帳の検討、地表に残る用水路や水田の形状、地名・伝承など「生きた文化財」の調査から山門領荘園の実態と中世村落の景観に迫る。

▼A5判・三九二頁／本体六、八〇〇円

環琵琶湖地域論

西川幸治・村井康彦編

地域研究の深化が求められる昨今。本書は、滋賀県立大学の研究スタッフが、琵琶湖をとりまく自然・経済・民俗・遺跡などをとりあげた成果11篇を収録。

▼A5判・三四〇頁／本体七、〇〇〇円

戦国大名佐々木六角氏の基礎研究

村井祐樹著

実証的な研究が不十分であった戦国大名佐々木六角氏について、可能な限り一次史料を用い、六角氏や家臣の動向、実態など基礎的事実を明かす。

▼A5判・五三〇頁／本体一一、六〇〇円

地域開発と村落景観の歴史的展開

多摩川中流域を中心に

原田信男編

考古遺跡・遺物、村絵図・地方文書などを手がかりとし、旧石器時代から前近代にわたって通史的に論じる。編者を中心に行われた共同研究の成果。

▼A5判・四八六頁／本体九、〇〇〇円

中世村落の景観と生活

思文閣史学叢書

関東平野東部を中心として

原田信男著

現地調査に基づき、地形や伝承、古文書や地誌、地理・考古学などをも援用して、典型的な中世村落の復元を試み、生活の諸相をふくめて総合的に考察。

▼A5判・六四〇頁／本体一〇、八〇〇円

佛教大学研究叢書25

碇（いかり）の文化史

石原 渉 著

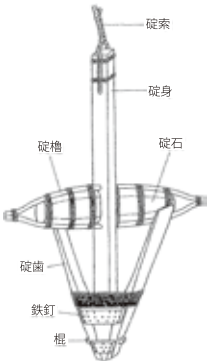
船や海事の象徴としてよく表される碇（いかり）だが、その先行研究は希薄であった。

本書では、先史の時代から石や木で作られた碇が、鉄の錨（いかり）へと移り変わる形態上の変化と発展の系譜をたどる。

歴史学という大きな枠組みの中から、時には水中考古学の見地から遺物をとらえ、またあるときは文献資料や絵画資料を駆使し、民俗例や伝承、風俗といったものも絡めて、碇を単なる繋船具というだけでなく、その変遷を通して見えてくる文化史を浮き彫りにしていく。

【4月刊行】 ▼A5判・三三二頁／**本体五、八〇〇円**

【内容】
先史時代のイカリ
古墳時代と古代のイカリ（碇）
「入唐求法巡礼行記」にみる碇（矼）
中世の碇
中世和船の碇
鉄製錨の登場とその原因
茨城県、南西諸島、沖縄本島で発見された碇石



木石碇の模式図

いしはら・わたる…一九五四年長崎県生。東海大学海洋学部、明治大学文学部史学地理学科卒業。佛教大学大学院博士課程文学研究科日本史学専攻修了。博士（文学）。（公財）日本習字教育財団理事・同付属博物館「観峰館」副館長。

別府大学文化財研究所企画シリーズ「ヒトとモノと環境が語る」③

大航海時代の日本と金属交易

平尾良光・飯沼賢司・村井章介編

最新の鉛同位体比分析の成果から、日本の銅生産や中世～近世日本の金属流通のありよう、南蛮貿易の意義などに新たな視角を提示する。巻末に戦国時代関連資料の鉛同位体比一覧を掲載。

▼B5判・二二四頁／**本体三、五〇〇円**

別府大学文化財研究所企画シリーズ「ヒトとモノと環境が語る」②

キリシタン大名の考古学

別府大学文化財研究所・九州考古学会・大分県考古学会編

大分の豊後府内遺跡や大村氏の城館跡、島原の原城跡などの発掘が進み、研究は新しい段階に入っている。文献史学や分析科学などの成果を融合し、新しいキリシタン考古学論・流通論など、新たな研究手法を提示する。

▼B5判・一七八頁／**本体三、八〇〇円**

南蛮・紅毛・唐人 一六・一七世紀の東アジア海域

中島楽章編

「南蛮」「紅毛」「唐人」、そして彼らと接した「倭人」たちが残した証言を、さまざまな視角から多面的に論じることにより、16～17世紀の東アジア海域における「紛争と交易の時代」のダイナミズムを描きだす。

▼A5判・四一八頁／**本体六、八〇〇円**

朱印船貿易絵図の研究

菊池誠一編

名古屋市情妙寺所蔵「茶屋交趾貿易渡海絵図」と、新出史料である九州国立博物館所蔵「朱印船交趾渡航図巻」の精彩なカラー図版にくわえ、美術史・歴史学および考古学など多彩な研究者による6篇の論考を収録。

▼A4判横本・一〇四頁／**本体七、八〇〇円**

近世琵琶湖水運の研究

杉江 進 著

近世における堅田の変貌、「諸浦の親郷」（堅田・大津・八幡）・湖北四ヵ浦・彦根三湊の三地域の対抗関係、船の航行と船支配の関係、という三つの視点を基軸に、近世前期琵琶湖水運の構造と特質、廻船規定、諸浦の盛衰を論究。

▼A5判・四六四頁／**本体九、〇〇〇円**

日本音楽史料叢刊　刊行！

カラー影印・図版

日本音楽史学の中核的拠点、上野学園大学 日本音楽史研究所創設以来40年にわたる研究の蓄積と成果を踏まえた叢刊。同分野の研究に必須の史料を厳選。史学・美術・文学研究にも新たな史料を提供する。

日本音楽史料叢刊1

陽明文庫蔵『舞楽散楽図』・法隆寺旧蔵　揩鼓

編著　福島和夫（上野学園大学 日本音楽史研究所）
藤原重雄（東京大学史料編纂所）

『舞楽散楽図』
陽明文庫蔵本は美術史にいまだ知られぬ優品。唐代舞楽・散楽の白描画。原本は唐代に成立し、日本に将来されたと推定される。陽明文庫蔵本が現存諸本中の祖本。

揩鼓（かいこ）
康治二年（一一四四）墨銘の法隆寺旧蔵揩鼓は、世界唯一の伝存楽器。西域より中国を経て日本に将来された。指でこすって音を出す特殊な奏法で知られる。

［内容］
図版篇
陽明文庫蔵『舞楽散楽図』（全頁カラー影印）
論考篇
『舞楽散楽図』　福島和夫
日本中世の図譜的な舞楽図について
——〔舞楽散楽図〕と宗達屏風の狭間　藤原重雄
法隆寺旧蔵　揩鼓　福島和夫

高久国際奨学財団研究助成事業

【5月刊行予定】

▼A4判横本・一三〇頁／**本体二、七〇〇円**

禁裏・公家文庫研究　第五輯

田島　公編（東京大学史料編纂所教授）

これまで勅封のため全容が不明であった東山御文庫本を中心に、近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収蔵本に関する論考・史料紹介・データベースを収載するシリーズの第五輯。

▼B5判・四八二頁
本体一二、〇〇〇円

平安時代陰陽道史研究

山下克明著

陰陽道の成立・展開期である平安時代を中心に、陰陽道のあり方、陰陽師たちの天文観測技術や呪術・祭祀など活動の実態とその浸透などをさまざまな角度から明らかにする。

▼A5判・四六〇頁／**本体八、五〇〇円**

平家物語生成考

浜畑圭吾著

平家物語諸本の比較を通して独自の表現や記事、改変された部分をあぶり出してその基盤を追究し、物語生成の動機や場、背景をつぶさに考察する。

▼A5判・三二〇頁／**本体七、〇〇〇円**

法制史料集　陽明叢書記録文書篇　第9輯

公益財団法人 陽明文庫 編／杉橋隆夫・佐古愛己 解説

本輯では、陽明文庫に架蔵された中世法制史料の優品を収録し、各書の書誌および史料的位置などに関する詳細な解説を付す。

▼菊判横本・三八八頁／**本体一二、〇〇〇円**

幕藩政アーカイブズの総合的研究

国文学研究資料館 編

【3月刊行】 ▼A5判・五〇四頁／本体八、五〇〇円

より効率的・継続的な統治を行うために、近世後期にはすでに形成されていた幕政・藩政文書の管理システム。各藩で実務に当たった者たちに焦点を当て、幕藩文書管理の歴史に更なる実証的研究を積み上げる国文学研究資料館共同研究の成果。

【内容】

序　章　幕藩政文書管理史研究と本書の概要（高橋実）

第1編　幕政文書の整理と管理

第1章　幕府勘定所における文書の整理と管理（戸森麻衣子）

第2章　長崎奉行所文書の引継ぎと管理について（高橋実）

第3章　京都町奉行所付雑色筆耕について
—文書行政と民間社会を媒介する実務者（冨善一敏）

第2編　藩政文書記録の管理と伝来

第4章　善光寺地震における松代藩の情報収集と文書管理（原田和彦）

第5章　尾張藩徳川家における文書の伝来と管理（太田尚宏）

第6章　土佐藩山内家文書の伝来と管理（藤田雅子）

第7章　熊本藩家老松井家文書の成立過程（林千寿）

第8章　対馬藩における文化九年「毎日記」の引用・書き分けと職務（東昇）

第3編　藩政文書記録の管理・編纂担当者

第9章　弘前藩江戸藩邸における日記方の設置と藩庁日記の管理（中野達哉）

第10章　米沢藩記録方の編纂事業に関する基礎的考察（浅倉有子）

第11章　近世中後期岡山藩における留方下僚の存立状況（定兼学）

第12章　萩藩当職所の文書管理と当職所記録方（山﨑一郎）

第13章　鳥取藩の領知判物発給と担当役人（来見田博基）

第14章　対馬藩における表書札方の設置と記録管理（山口華代）

第15章　薩摩藩の藩政文書管理と筆者（林匡）

終　章　近世における文書行政の高度化と明治維新（吉村豊雄）

中世アーカイブズ学序説

上島 有 著

文書を文献資料としてのみでなく「もの」として捉え、その総体を研究対象としてきた著者が、永年の研究成果を「アーカイブズ学序説」としてまとめる。

【内容】 序章 アーカイブズ学としての中世古文書学／第一章 妙蓮寺の近世文書について／第二章 近世の武家書札礼と公帖／第三章 近世の領知判物・朱印状と公帖／第四章 天龍寺の朱印状と公帖／補論3篇

【5月刊行予定】 ▼B5判・四二六頁／本体一三、〇〇〇円

東寺百合文書を読む

よみがえる日本の中世

上島有・大山喬平・黒川直則編

※東寺百合文書から50点を選び、釈文と第一線の研究者による解説を付す。
※各文書を大型写真で掲載した、中世文書を読み解くための格好の入門書。
※索引・文書編年目録・参考図版を付す。

▼B5判変・一六四頁／本体二、五〇〇円

識字と学びの社会史

日本におけるリテラシーの諸相

大戸安弘・八鍬友広編

近代学校制度が導入される以前までの、日本の識字と学びの歴史的展開とその諸相を、様々な史料から多面的に掘り起こし、実証的な検討を試みる。地域性と個別性を意識した事例の検証が必ずしも十分とはいえない現状に一石を投じる、気鋭の教育史研究者7名による論文集。

▼A5判・三七二頁／本体七、〇〇〇円

近世史小論集

古文書と共に

藤井譲治著

日本近世政治史研究の泰斗である著者が、研究をはじめたころからごく近年にいたる間に書いた小論のうち、あまり目にとまらないところに収められたもの、入手の困難なものの中で著者の主要な研究の前提、あるいはその後の展開にかかわる論考を集成。約40年におよぶ研究の軌跡を振り返る。

▼A5判・四九〇頁／本体六、〇〇〇円

徳川社会と日本の近代化

笠谷和比古 編

▼A5判・七三〇頁／本体九、八〇〇円　【4月刊行】

一九世紀のアジア情勢を見るとき、日本が植民地化の途を歩まず独立を堅持した理由として、欧米列強に互しうるだけの力を蓄えていた徳川日本の文明史的力量に着目せざるをえないであろう。徳川社会はどのような力 powerを、いかにして形成しえたのか、多分野の研究者の書き下ろし論文25本により総合的に究明する。

内　容

序論　徳川時代通史要綱　**笠谷和比古**

Ⅰ　政治

新井白石と「政治」　**大川　真**
徳川吉宗の武芸上覧　**横山輝樹**
一九世紀の藩政情報―諸藩見聞録の分析―　**磯田道史**
会津戊辰戦争の戦後処理問題をめぐる一考察
―松平容保家族の処遇を中心に―　**岩下哲典**

Ⅱ　思想

長州藩明倫館の藩校教育の展開　**前田　勉**
日本儒学における考証学的伝統と原典批判
―G-B・ヴィーコ、A・ヴェクらのフィロロギー、そして清代考証学との比較のなかで―　**竹村英二**
本多利明の北方開発政策論
―『蝦夷拾遺』を中心として―　**宮田　純**
幕末から明治、後期水戸学「影」の具現者
―久米幹文を中心として―　**上村敏文**

Ⅲ　文化

藩校における楽の実践
―弘前藩校稽古館を例として―　**武内恵美子**
大武鑑「大名付」と板元と大名家
―江戸出版の仕組み―　**藤實久美子**
宝永地震と近松の浄瑠璃
―『心中重井筒』の場合―　**原　道生**
『道の幸』『諸国風俗問状答』からみた松平定信の文化政策の背景　**森田登代子**
東北農村における結婚パターンの変容
―一八・一九世紀の歴史人口学的分析―　**平井晶子**
一九世紀における剣術の展開とその社会的意味　**魚住孝至**

Ⅳ　科学

中根元圭と三角法　**小林龍彦**
高松松平家博物図譜の成立
―一八世紀博物図譜の模索―　**松岡明子**
蘭書による西洋天文学の受容の始まり
―『ラランデ暦書』の入手・翻訳をめぐって―　**和田光俊**
江戸後期幕府・諸藩の近代化努力と大砲技術　**郡司　健**

Ⅴ　国際

オランダ商館長と将軍謁見
―野望、威信、挫折―　**フレデリック・クレインス**
一七～一九世紀における日本の朝鮮史認識形成の特色
清朝考証学の再考のために　**平木　實**
―中国・清代における『尚書』をめぐる文献批判とその位相、あるいは、伝統と近代、日本との比較の視点から―　**伊東貴之**
兼葭堂が紡ぎ、金正喜が結んだ夢
―東アジア文人社会の成立―　**高橋博巳**
幕末最終章の外交儀礼
神戸開港に臨んだ外国奉行柴田剛中
―大坂町奉行・兵庫奉行兼帯期の動向―　**佐野真由子**　**菅　良樹**

近世の王権と仏教

大桑斉著

【5月刊行予定】

通説的には、近世という時代は、宗教世界中世を克服した世俗世界であるとされる。
本書は、そのような認識を、近代の眼からのものとして真っ向から批判する。近世国家・社会そのものが神聖性・宗教性を帯びていたとして、徳川家康による将軍権力の成り立ちを、その神格化・神体化に着目して、家光・綱吉期までを対象に論ずる。
さらには、救済宗教という様相をもつ真宗の位置を問題化し、仏教的世界としての近世を論じた諸論考を収める。

予定内容

序　言　―なぜ、近世、王権、仏教、なのか

■**第一部　将軍権力と仏教**■

第一章　近世国家の宗教性
第二章　徳川将軍権力と宗教―王権神話の創出
第三章　綱吉政権における王権と仏教―増上寺法問をめぐって
第四章　『松平開運録』の諸問題
第五章　幕藩権力と真宗―近世真宗の研究状況と視点

■**第二部　仏教思想論**■

第一章　戦国思想史論
第二章　仏教的世界としての近世
第三章　近世国家の宗教編成とキリシタン排撃
第四章　東アジア近世世界の思想史的成立

▼A5判・三四〇頁／**本体六、五〇〇円**

おおくわ・ひとし…一九三七年生。大谷大学大学院文学研究科博士課程満期退学。博士（文学）。大谷大学教授を経て、現在、大谷大学名誉教授。

中世寺院社会と民衆

下坂守著

衆徒と馬借・神人・河原者

中世において比叡山延暦寺が果たした歴史的役割を、同寺の活動実態とその支配下にあった京・近江の民衆との関係を中心に考察する。

▼A5判・四三二頁／**本体七、五〇〇円**

日本中世の地域社会と仏教

湯之上隆著

写経や法会、開板事業、偽文書など様々な事象を通した、個人や集団の宗教行為がもつ社会性を宗派・教学の枠を越えて具体的に考察。

▼A5判・三八四頁／**本体八、〇〇〇円**

天下人の神格化と天皇

野村玄著

秀吉や家康の神格化が、なぜ近世前期の政治過程において要請され、どのように実現したのかを解明し、そこでの天皇・朝廷の行動と意味を再検討。

▼A5判・三八四頁／**本体七、〇〇〇円**

近世の禁裏と都市空間

岸泰子著

禁裏に関する信仰や儀礼の場・空間の特性に注目。都市・建築史学のみならず近世京都の都市空間の特徴を多角的な視点から包括的に論究。

▼A5判・三二〇頁／**本体六、四〇〇円**

熊沢蕃山の思想冒険

山田芳則著

熊沢蕃山の一つ一つの著作の思想構造の解明をめざし、さらにそれぞれの著作を比較することで、蕃山の思想の変化に注目し、その変化の意味を問う。

▼A5判・二一八頁／**本体五、〇〇〇円**

近世の公家社会と京都

集住のかたちと都市社会

登谷伸宏著

▼A5判・三九〇頁／**本体八、〇〇〇円**

近世都市京都の大きな特徴は、朝廷・公家社会の存在にある。本書は、公家町の形成・変容過程の解明を通じて、公家町を中心とした京都の都市空間の特質を明かす。あわせて、都市における公家の集住・居住形態、および町方社会との関係を検討し、近世京都がいかなる都市社会構造を形成していたのかを論じる。

目　次

序　章　近世都市京都研究における公家社会の位置

【第1部】

第一章　近世における公家町の形成について

第二章　陣中から惣門之内へ—公家町の成立とその空間的特—

第三章　十七世紀後半における公家の集住形態について—近世以降創立・再興した公家を中心として—

第四章　元禄・宝永期における公家の集住形態と幕府の対応について

第五章　宝永の大火と公家町の再編

第六章　宝永の大火と公家の集住形態の変容について

【第2部】

第一章　堂上公家の町人地における屋敷地集積過程について—久世家を事例として—

補　論　町人地における公家の屋敷地買得について

第二章　町人地における久世家の居住形態について

第三章　幕末期における地下官人真継家の居住形態について

第四章　御産所と都市社会—霊元天皇の後宮を中心として—

結　章　近世都市京都と公家社会

とや・のぶひろ…一九七四年京都市生。二〇〇六年京都大学大学院工学研究科生活空間学専攻博士後期課程修了。京都大学博士（工学）。二〇一二年 京都橘大学文学部歴史遺産学科助教。

【4月刊行】

大坂蔵屋敷の建築史的研究

植松清志編著

谷直樹・岩間香・中島節子執筆

江戸時代、大名・旗本などの諸領主が、貢租米や領内の特産品を販売・貯蔵するために設置した蔵屋敷について、建築史的な観点から蔵屋敷の変遷、建築構成・空間構成、居住性などを研究する。

史料篇として現存する蔵屋敷絵図のトレース図面を網羅的に掲載。

目　次

序　章　大坂蔵屋敷の建築史的研究

第一章　西国大名の大坂蔵屋敷—佐賀藩大坂蔵屋敷の成立と変遷—

第二章　西国大名の大坂蔵屋敷—徳島藩大坂蔵屋敷の建築構成—

第四章　奥羽諸藩における上方屋敷の変容—弘前藩・秋田藩の上方蔵屋敷—

第五章　大坂蔵屋敷の鎮守社と祭礼

第六章　「よと川の図」と福岡藩蔵屋敷

第七章　畿内小藩の大坂蔵屋敷—小室藩大坂蔵屋敷の成立と解体—

第八章　幕末における大坂蔵屋敷の新傾向—松代藩大坂蔵屋敷—

第九章　幕末における大坂蔵屋敷の新傾向—御三卿清水家の大坂蔵屋敷—

結　章　大坂蔵屋敷の成立と展開

【4月刊行】

▼B5判・二五八頁／**本体四、八〇〇円**

うえまつ・きよし…一九五二年生。大阪市立大学大学院生活科学研究科生活人間科学専攻博士課程（後期）終了、博士（学術）。大阪人間科学大学教授。

近世日本の銅と大坂銅商人

今井典子著　【5月刊行予定】

近世日本は世界でも有数の銅輸出国であり、銅は長崎貿易の重要な輸出品であり続けた。また国内ではさまざまな銅製品が流通し、さらに真鍮などの銅関連市場が活況を呈した。

本書は、その最大市場である大坂の銅商人社会が成立・変容する過程を軸にして、銅の生産・流通の歴史を通覧。住友家文書や初村家文書など関連史料を丁寧に読み解き、長崎貿易の動向・幕府の統制・相場の変動なども視野に入れながら論じた本邦初の銅の近世通史である。

内容

第一章　大坂銅商人社会の成立と変容
大坂銅商人一覧／「銅吹屋の時代」から「銅仲買と真鍮屋の時代」への移行／棹銅の製造法・南蛮吹の効用と銅吹屋／銅吹屋仲間一七人の変容／真鍮産業の発展

第二章　大坂銅商人の長崎銅貿易
定高制／銅代物替／運上付き請負い／元禄銅座／銅吹屋仲間の長崎廻銅請負い

第三章　長崎会所の銅貿易と大坂銅商人
御割合御用銅／第一次長崎直買入れ／元文銅座の設置と荒銅買上げ方法／長崎会所と幕府御金蔵／第二次長崎直買入れとその後

第四章　地売銅と鉛鉱業
近世の地売銅／近世の鉛鉱業

第五章　元文銅座と大坂銅商人
元文銅座の鋳銭／元文銅座後半の諸問題／元文銅座の勘定帳

第六章　明和銅座と大坂銅商人
明和銅座の設置と銅の総体的統制／明和銅座の地売銅統制／古銅の統制／明和銅座の財政／専売制の継続と御用銅の廃止

▼A5判・三二〇頁／**本体七、五〇〇円**

いまい・のりこ…一九四二年京都市生。もと住友史料館勤務。

角倉一族とその時代

森洋久〔国際日本文化研究センター准教授〕編　【5月刊行予定】

近世の文化・技術の総体の中で角倉一族の業績を俯瞰的に検討。

第一部　吉田・角倉家の系譜
角倉了以・素庵の人物像［若松正志］／土倉としての角倉［河内将芳］／角倉家と公家・武家・寺社との関係［同上］／幕府上方支配における幕臣・京角倉家と嵯峨角倉家［菅良樹］

第二部　吉田家の医業
近江の吉田家と京都進出の仮説［奥澤康正］／医家吉田家の家系図と人物像［同上］／患者としての角倉了以と素庵・光好の病［同上］ほか

第三部　社会基盤と角倉
〈土木技術〉高瀬川［福本和正］／資料紹介：高瀬川の発掘調査成果［鈴木久男］／菖蒲谷池隧道［福本和正］／森幸安の地誌・地図に記された角倉関連情報［辻垣晃一］／穴太衆積み［粟田純司］／洛西・嵯峨野の庭園とその技法［金久孝喜］
〈水運〉保津川下り船頭の操船技術と精神［豊田知八］／保津川下り［上林ひろえ］／嵯峨嵐山の薪炭商小山家について［鈴木久男］／富士川舟運について［石川武男］／近世オランダにおける水運事業と測量［中澤聡］／御土居藪と角倉与一［中村武生］

第四部　海外貿易と船の技術
清水寺の角倉船絵馬［坂井輝久］／角倉家と朱印船貿易［佐久間貴士］／角倉一族と安南朱印船交易［葉山美知子］／朱印船時代における「日本前」船と南シナ海の造船事情［金子務］

第五部　算　術
『塵劫記』から和算へ［小寺裕］／吉田光由と続く数学者［鳴海風］／近世の暦と天文学［小林龍彦］／西洋数学と和算［森洋久］

第六部　嵯峨本と古活字
嵯峨本の特徴と魅力について［林進］／嵯峨本の世界［高木浩明］／嵯峨本　謡本［伊海孝充］／〈嵯峨本〉以前の古活字版について［森上修］

▼A5判・六〇〇頁／**本体八、八〇〇円**

前野良沢 生涯一日のごとく

【5月刊行予定】

鳥井裕美子著

解体新書の訳者として知られる江戸時代の蘭学者・前野良沢の評伝。これまで『解体新書』刊行を中心に論じられてきた良沢の生涯を、彼の著訳書や周辺資料から再検討し、新たな良沢像を構築する。

【内　容】

第一章　徳川吉宗と青木昆陽　徳川吉宗とオランダ／青木昆陽のオランダ語学習

第二章　前野良沢　前野良沢の出生と家系／中津藩江戸屋敷と「医師」の格／オランダ語との出会い／明和六年の長崎遊学／長崎遊学の成果

第三章　『解体新書』　杉田玄白と「ターヘル・アナトミア」／翻訳開始とその方法／良沢のオランダ語指導／『解体新書』完成へ／良沢にとっての『解体新書』

第四章　安永・天明時代の良沢　『解体新書』後の玄白と良沢／安永時代の著訳書／大槻玄沢との出会い／天明時代の良沢の著訳書

第五章　ロシア研究の時代と良沢　ロシアの南下／幕府の北方政策／良沢のロシア研究／寛政初年の良沢／「魯西亜本紀」と「魯西亜大統略記」

第六章　良沢の晩年　江馬蘭斎の入門／芝蘭堂「新元会」と良沢／晩年の日常生活／奥平昌高と良沢／天文方との交流／良沢の死

第七章　没後の評価　江戸後期／明治期の顕彰活動と贈位／蘭学（洋学）史の大綱／良沢の肖像と遺墨について

▼四六判・三三二頁／本体二、五〇〇円

とりい　ゆみこ…神奈川県鎌倉市生、大分大学教育福祉科学部教授。

幕末・維新の西洋兵学と近代軍制

竹本知行著

大村益次郎とその継承者

日本という近代国家形成と国民形成の推進に大きな役割を果たした軍隊の創設の軌跡を、大村益次郎とその遺志をついだ山田顕義らの動向にたどり、その政治史上の特性を探る。　▼A5判・三四〇頁／本体六、三〇〇円

緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く

緒方洪庵記念財団・除痘館記念資料室編

天然痘予防の普及活動の拠点となった大阪の「除痘館」の活動記録「除痘館記録」。本書は第一部で「除痘館記録」の原本図版・翻刻・現代語訳・註と解説、第二部に論考を配した一書である。

【内容】

第一部　「除痘館記録」を読む　「除痘館記録」の影印／「除痘館記録」の翻刻・読解／現代語訳「除痘館記録」／「除痘館記録」の註と解説

第二部　天然痘対策と除痘館活動

第一章　天然痘対策と緒方洪庵　天然痘との闘い（米田該典）緒方洪庵と「除痘館記録」（淺井允晶）

第二章　大阪の除痘館の成立と展開　モーニケ苗の伝来と展開（米田該典）大阪の除痘館の成立（淺井允晶）大阪の除痘館の活動と官許（古西義麿）尼崎町除痘館の創成と展開（古西義麿）

第三章　牛痘種痘法の意義と役割　エドワード・ジェンナーによる牛痘種痘法の開発（加藤四郎）天然痘対策の今日的意義（加藤四郎）

コラム　大阪と江戸・東京－緒方洪庵の二つの墓所／古手町除痘館記念碑の建立／除痘館での牛痘種痘接種風景／尼崎町除痘館記念銘板

【5月刊行予定】　▼A5判・二一〇頁／本体二、三〇〇円

緒方郁蔵伝

古西義麿著

幕末蘭学者の生涯

洪庵の義兄弟である郁蔵。著書や資料を丹念に読み解き、蘭学者・郁蔵の実像を明かす。　▼A5判・一八六頁／本体二、五〇〇円

緒方惟準伝

中山沃著

緒方家の人々とその周辺

緒方洪庵の嫡子、緒方惟準の自叙伝「緒方惟準先生一夕話」を軸として、著者が博捜した資料とともにその生涯と交遊を詳述。幕末・明治初期の医学界をものがたる基本図書。　▼A5判・一〇一八頁／本体一五、〇〇〇円

近代日本〈陳列所〉研究

三宅拓也著　▼A5判・六四〇頁／**本体七、八〇〇円**

「物産陳列所」や「商品陳列所」などという名称を冠せられて建設された公共の陳列施設が、都市の農業・工業・商業を奨励する目的で各地に設置された経緯を検証。制度・活動・建築を含めて都市との関わりに注目することで、明治から昭和戦前期の日本にあまねく普及した〈陳列所〉の実態を、豊富な図版とともに明らかにする。【3月刊行】

[内容]

序　章　〈陳列所〉研究史と本書の視座
第一章　一九世紀末における商品陳列機関の世界的流行
第二章　明治初期の勧業政策と陳列所施設
第三章　「通商博物館」設置計画と「商品陳列所」の受容
第四章　農商務省による〈陳列所〉組織化の試み
　　―貿易品陳列館設立から「道府県市立商品陳列所規程」制定まで
第五章　多様化する〈陳列所〉―内地・外地の〈陳列所〉
第六章　社会教育施設としての〈陳列所〉―山口貴雄による運営とその建築
結　章　近代日本の〈陳列所〉
付　録：〈陳列所〉建築一覧など

みやけ・たくや…一九八三年生。京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科卒業。同大学院工芸科学研究科博士後期課程修了、博士（学術）。京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科助教。二〇一二年度全日本博物館学会奨励賞受賞。

原爆ドーム
（元・広島県物産陳列館）

近代日本の都市社会政策とマイノリティ
―歴史都市の社会史

杉本弘幸著　▼A5判・四一二頁／**本体七、二〇〇円**

近代日本の社会政策・社会福祉の受益者である社会的マイノリティはどのように政策形成に関与しようとし、政策に包摂されていったのか。蔓延する貧困と格差への対応を模索し続けている現代社会に、政策の受益者の動向から再構成した社会政策史・社会福祉史の実証研究を提示する。【3月刊行】

[内容]

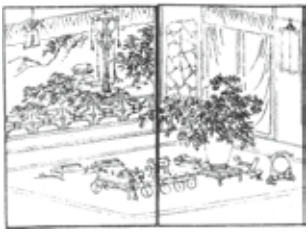
序　章　課題と方法
第1部　都市社会行政の形成と展開
第1章　都市社会行政機構の形成
第2章　府県社会行政と都市社会行政の関係構造
　　―財団法人京都共済会を事例に―
第3章　都市社会事業施設の運営と市政・地域社会
　　―京都市児童院を事例に―
第4章　都市社会行政職員の役割・特質・機能
第5章　失業救済事業と市政・地域社会
第2部　都市社会政策と社会的マイノリティ
第6章　「不良住宅地区」と地域住民の変容
第7章　在日朝鮮人女性の自主的救済事業と「内鮮融和」―「親日派新女性」金朴春の思想と行動―
第8章　都市社会政策と「内鮮融和団体」の形成と変容
第9章　都市社会政策の再編成と市政・地域社会
第10章　不良住宅地区改良事業の形成と変質
第11章　一九四〇～六〇年代の都市社会政策と地域住民組織
終　章　総括と課題

すぎもと・ひろゆき…1975年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士（文学・大阪大学）。日本学術振興会特別研究員、龍谷大学非常勤講師を経て、現在、京都工芸繊維大学・佛教大学・立命館大学非常勤講師。

茶と室内デザイン

小泉和子（家具道具室内史学会会長）編

日本的とされる日本住宅の室内デザインはほとんどが茶によって育まれたといえる。茶が日本住宅の室内意匠にあたえた影響について、それぞれの専門の立場からの論考を収録し、豊富なカラー図版とともに、茶道と室内デザインの関係性を考える一書。



『雲煙供養図録』明治13年（1880）
国会図書館所蔵

【内容】

煎茶と室内デザイン
煎茶席の意匠的特質　麓　和善
「煎茶的」ということ　小川後楽
煎茶と唐木家具　小泉和子
黄表紙挿絵のモチーフに表された唐風趣味
―安永期から天明期の作品を中心に―　鶴岡明美
十八～十九世紀朝鮮における茶亭とその家具　西垣安比古

侘数寄と室内デザイン
茶室―建築と道具の間―　熊倉功夫
茶室の建築と意匠　矢ヶ崎善太郎
私の茶室像　藤森照信
侘数寄の茶と指物　小泉和子

【6月刊行予定】

▼A4判・一四〇頁／本体三、五〇〇円

器を楽しむ　逸翁の茶懐石

逸翁美術館編

【4月刊行】

懐石とは、本来は「茶懐石」と呼ばれて、特に正式な茶事の席には欠かせない要素であり、小林逸翁は茶懐石に西洋の器を積極的に用いた先駆者だった。逸翁愛用の懐石の器に合わせて、時代とともに変遷する逸翁の茶懐石を紹介。二〇一五年四月から逸翁美術館で開催の同名の展覧会図録。

[図版解説]
一章 初期の懐石　二章 器を考える　三章「簡素な懐石」を目指して
四章 吉兆庵の数寄

[論説]
逸翁と食―茶懐石を中心に―　竹田梨紗

▼A4判・一〇二頁／本体一、〇〇〇円

国宝油滴天目茶碗と国宝飛青磁花生　伝世の名品

大阪市立東洋陶磁美術館監修／三好和義撮影

大阪市立東洋陶磁美術館所蔵「唐物」の名品から7点を選び、その魅力を詳細に細部に至るまでカラーの高精細大型図版で紹介。

編集発行：大伸社

▼A4判変・六四頁／本体一、九〇五円

茶湯百亭百会　顕岑院本三

白嵜顕成著

伊丹の町人、有岡道瑞がみずから参席した茶会から百会をまとめた茶会記。顕岑院本を一会ごと掲げ、茶会記をひもときながら、人物・道具・飾り・料理などの多彩な世界を明かす。

▼A5判・九三四頁／本体二〇、〇〇〇円

日仏マンガの交流

―ヒストリー・アダプテーション・クリエーション

大手前大学比較文化研究叢書11

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編　【5月刊行予定】

大手前大学で行われた日仏文化交流シンポジウムの成果。日仏両国および海外のマンガ／バンド・デシネ文化について、各国の特質と相互の交流を、特徴・受容・翻訳などの視点から考察する。

予定内容

まえがき　［柏木隆雄］

第1部　マンガの世界

―アメリカ漫画からマンガへ

物語マンガの発展　［小野耕世］

―日本・アメリカ・フランスで、どう異なるのか

アジアにおけるマンガの特徴と現状　［倉田よしみ］

日本マンガの現状と特徴　［徳田俊之］

試論：なぜ「未来マンガ」に未来はないか　［石毛　弓］

第2部　バンド・デシネ―風刺から始まる

フランス漫画の原点―グランヴィル、ガヴァルニ、ドーミエ　［柏木隆雄］

バンド・デシネの遺伝子とその進化論　［パトリック・オノレ］

『タンタン』と『アステリックス』の日仏受容　［岩本和子］

―2つのBDにみる〈ベルギー性〉と〈ガリア主義〉

開かれた輪郭　［カトリーヌ・ムリス］

『坂道のアポロン／Kids on the slope』マンガ共同翻訳のプロセス、可能性とその意義　［関口涼子／パトリック・オノレ］

第3部　マンガ―読むひと・描くひと・訳すひと

対談：〈食〉を描くということ―漫画家の現場から　［うえやまとち／倉田よしみ］

全体討論

▼A5判・二七六頁／本体二、八〇〇円

日仏文学・美術の交流

「トロンコワ・コレクション」とその周辺

大手前大学比較文化研究叢書10

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編

明治期に日本で蒐集されたコレクションを柱に、日仏美術の交感を論じる。

▼A5判・二八四頁／本体二、八〇〇円

琳派　響きあう美

河野元昭著

広範な学識と鋭敏でしなやかな感性に支えられた河野美術史の世界。日本近世絵画史全体にわたる業績から、中核をなす琳派研究27篇を集大成。

▼A5判・八八〇頁／本体九、〇〇〇円

風俗絵画の文化学Ⅲ

瞬時をうつすフィロソフィー

松本郁代・出光佐千子・彬子女王編

「風俗絵画研究会」の文化学的探求の研究成果をまとめたシリーズ第3弾。

▼A5判・四三四頁／本体七、〇〇〇円

セザンヌと鉄斎

同質の感動とその由縁

山岸恒雄著

フランスの画家ポール・セザンヌと富岡鉄斎。両者の絵の同質性については、以前より指摘があったが、その理由については、明かされていない。本書は、この同質性が何に由来するものなのか、また何を意味するものなのかを、両画家の生い立ちや教育、思想、哲学、人生観、芸術観等から明かす。

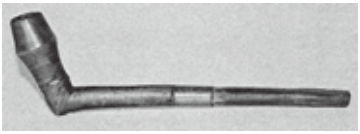
【5月刊行予定】　▼A5判・三四〇頁／本体二、八〇〇円

世界喫煙伝播史

【5月刊行予定】

鈴木達也著

前著『喫煙伝来史の研究』で従来の諸説の問題点に光りを当てた著者が、前編では新大陸からヨーロッパ、中近東、アフリカの諸地域へ伝播したタバコと喫煙について考察。これをふまえて後編では日本への伝来、アジア近隣国への伝播について、これまで定説的に扱われてきた諸説を改めて見直し、時間軸上に矛盾のない説を展開する。



予定内容

前編　新大陸から旧大陸へ
コロンブス以前の喫煙／新大陸からヨーロッパへ／旧大陸最初の喫煙国：イングランド／ヨーロッパの集散・加工基地：オランダ／北欧諸国の喫煙／ドイツ・イタリア・フランス・ロシア・ギリシャ・ハンガリーへの伝播／スペインへの伝播／イスラム社会とアフリカへの水パイプの伝播

後編　日本への伝播そして近隣アジア諸国へ
日本への喫煙伝播／タバコ・喫煙伝来マニラ（スペイン）説の諸問題／キセルの起源とその語源／長崎出島のオランダ商館とパイプ／アジアの近隣諸国へ

▼A5判・五五〇頁／**本体 八、五〇〇円**

すずき・たつや…一九三八年北海道生、上智大学外国語学部卒業。現在、トランステクネ・インターナショナル株式会社社長、日本パイプクラブ連盟名誉会長、国際パイプクラブ委員会副会長、国際パイプ・アカデミー理事。

喫煙伝来史の研究

鈴木達也著

南蛮人により日本にもたらされたタバコ。実はその伝来時期ははっきりしていない。外国語文献に精通する著者が、史料を駆使して従来の諸説を見直す。

▼A5判・三六〇頁／**本体五、五〇〇円**

船簞笥の研究

小泉和子著

近世船乗りが船内で使用した収納家具。様式史としてではなく、船簞笥自体を歴史を語る史料として試みた一書。二二五点の写真・詳細データを収録。

▼A5判・四一〇頁／**本体六、〇〇〇円**

日本の食の近未来

熊倉功夫編

現代日本の「食の豊かさ」は今後何をもたらすのか？日本の現代に疑問を感じた8名の研究者が、食文化の近未来について共同研究会を行った成果。

▼四六判・二六〇頁／**本体二、三〇〇円**

老舗に学ぶ京の衣食住

西岡正子編　佛教大学四条センター叢書

古くからの技と伝統を守り継ぐ老舗。技や歴史はもとより、生活のなかに息づく智恵や文化、経営哲学、理念をその主人や、おかみ自ら紹介する。

▼A5判・二四二頁／**本体一、九〇〇円**

着衣する身体と女性の周縁化

武田佐知子編

着衣という共通の素材を通し、さまざまな社会におけるジェンダーのあり方を考察。グローバルな視点から、衣服と身体の表象について解き明かす26編。

▼A5判・五〇〇頁／**本体五、八〇〇円**

世界を巡る美術探検

木村重信著

民族芸術学を提唱してきた著者が、世界のほぼ全域で行ったフィールドワークのルポ。歴史という時間軸と、地域という空間軸とを交差させて叙述。

▼A5判・三〇八頁／**本体二、四〇〇円**

――思文閣グループの逸品紹介――

美の縁

び　よすが

一つの箱に小ぶりなお茶道具を納め、どこでも容易にお茶を楽しむことのできる「茶の箱」。本作は、漆器伝統の町・輪島で塗師として活躍されている赤木明登氏によるもので、氏のコンセプトに共感した、様々な分野の作家が手掛けたお茶道具を取り合わせたものです。

一つ一つ仕覆に包まれたお道具類は、独特の質感を持つ「輪島紙子（わじまかみこ）」の外箱に整然と納められており、その包を解くと、美しいフォルムの茶碗や茶入、茶杓、菓子器などが次々と姿をあらわし、見るものを魅了してやみません。

❖茶（ちゃ）の箱（はこ）❖

赤木明登（あかぎあきと）

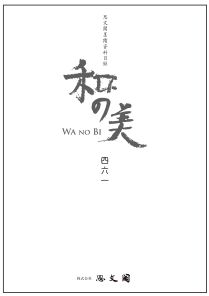
流派にとらわれず、また気軽にお茶を楽しみたいという赤木氏の想いが詰まった「茶の箱」には、お茶道具の他に酒器も組まれています。一見金工のようにも見える、「古銀（こぎん）」という技法で仕上げられた酒次は赤木氏による漆芸で、そのモダンな風合いは漆の新しい可能性を感じさせてくれます。

「茶の箱」を携え、春の陽気に誘われ花見を楽しんでみたいものです。

（思文閣営業総務部・三村明依子）

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合せください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
http://www.shibunkaku.co.jp/
info@shibunkaku.co.jp

スマートフォン・タブレット専用

思文閣の査定申込みアプリ

丁寧なガイダンスとカンタン操作で、査定申込みをお手伝いします。
思文閣の専門スタッフがお手持ちの作品を丁寧に拝見、後日査定結果をお知らせいたします。

無料配信中

「美術品査定」で検索、無料ダウンロード

Available on the App Store　ANDROID APP ON Google play

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
http://www.shibunkaku.co.jp/
satei@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年4回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。

百々世草　全三帖

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/
kosho@shibunkaku.co.jp

小川待子　結晶と記憶
Machiko Ogawa　Crystals and Memories

ぎゃらりぃ思文閣
2015年4月11日(土)-29日(水・祝)
思文閣銀座
2015年5月11日(月)-24日(日)

ぎゃらりぃ思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 386
TEL(075)761-0001　gallery@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/gallery/